

本
文
篇

凡例

一、神宮文庫蔵の延宝二年版『續松葉集』四卷四冊を底本として全文翻刻した。

一、翻刻に当たっては、可能な限り底本に忠実であることを期するために、漢字・仮名の別、語の清濁、宛字、踊り字、送り仮名の不足、仮名遣いの乱れ等もすべて底本のままとした。

一、底本における誤字・誤刻・脱字・衍字等はすべて原文通りとし、誤植との誤解をまねく恐れを有する場合には限り、本文の右傍に(ママ)を施した。

一、漢字の字体は通行字体を用いたが、底本における使用例、通行の度合い等に応じて次に掲げる異体・略体等を使用した。

(イ) 次のような諸字は底本に従って両字体とも採用した。

哥	歌	龜	龜	杉	楯
尺	枳	声	聲	陀	陀
沢	澤	灯	燈	仏	佛
辺	邊	宝	寶	峯	峰
余	餘	万	萬	乱	亂

(ロ) 次のような諸字は通行の正字体または俗字体に改めた。

往	往	鶴	鶴	厂	厲	厲
規	規	奈	松	秋	秋	秋
筵	簾	杳	杉	船	船	船
蛭	蠶	珍	珍	府	府	府
杳	袂	霧	霧	磨	磨	摩

一、底本の丁移りは翻刻では表裏の区切れに「印をつけて、下に丁数を意味する漢数字とオ(表)、ウ(裏)の略号をもって示した。ただし、全巻共通ではないので次に各巻について記しておく。

(イ) 巻第一・巻第二は、底本では三段に分かれており、上段に景物及び語句、中段に名所があり、下段に和歌は一首一行になっている。一般的には、上段が頭注部分、中・下段が本文部分に相当する。上・中段の間には匡郭での区切りが施されていることから、上段と下段(中・下段)とに分かれているとするのがより適当であろう。翻刻においては、いずれも底本に近似した形で組版した。なお、丁移りに関しても、底本通りに「ニ・オ・ニ」のように区別したが、上段には行数の多寡があるため、組版の都合により、必ずしも中・下段の当該箇所収まっていけない部分が存する。殊に巻第二はズレが生ずるので留意されたい。

(ロ) 巻第三は、題詞が巻第一・巻第二の名所部分に相当し、和歌はその下に一首一行になっているが、それぞれ底本通りに組版した。なお、底本の空白部分は(以下六行分余白)のように示し、追い込む形を採った。

(ハ) 巻第四は和文が主体となっているので、底本通りの体裁ではなく追い込む形を採った。その場合丁移りは、本文中に「ニ・オ・ニ」のように丁数及び表裏を示した。また、句読点は概ね中央下に「・」をもって施されているが、原状では句点・読点の区別は認め難い。したがって、翻刻ではすべて「・」として示した。若干の「。」が存するが、それも底本通りに示した。なお、底本の跋文には句読点はない。これは編者が私に施したものである。

一、和歌には、脚部に排列順に従って歌番号を施し、検索の便を図った。(したがって、集自体の重出歌や他人の歌にも歌番号が施してある。)

一、最後に、本書を編むに際して、翻刻出版を御許可くださった神宮文庫、また、図版掲載を御許可くださった宮内庁書陵部・神宮文庫・内閣文庫に対して、それぞれ深謝申し上げる次第である。

續松葉集第一 名所部 (題簽)

畿内

山城 大和 河内 和泉 攝津

東海道

伊賀 伊勢 志摩 尾張 參河 遠江

駿河 伊豆 甲斐 相模 武藏 安房

上総 下総 常陸

東山道

近江 美濃 飛彈 信濃 上野 下野

陸奥 出羽

北陸道

若狹 越前 加賀 能登 越中 越後

佐渡 山陰道

山陰道

丹波 丹後 但馬 因幡 伯耆 出雲

石見 隱岐

山陽道

播磨 美作 備前 備中 備後 安藝

南海道

紀伊 淡路 阿波 讃岐 伊豫 土作

西海道

筑前 筑後 肥前 肥後 豊前 豊後

日向 大隅 薩摩 壹岐嶋 對馬嶋

レ
ッ

續松葉集第一（内題）

▲八幡山君か代 藤浪住吉神垣 神社祥花 御幸松月	山城	石清水	神祇	まもれわかあふく心は石清水いはても神やくみてしらし	一
▲神山坂瀧霞 尾上杉花雀 山下水	同	稻荷山	同	いなり山神の心や瀧つ瀬の流絶せず世を守る覽	二
▲賀茂杜松虫 松櫻花秋の花 花の都紫野	同	齊院	社頭花	櫻咲いつきの宮の松風はしめの内をやよきて吹らん	三
▲花の都紫野 社豊御幣	同	今宮	物名	なかゝらん御代の為とて更に今宮古の北に祝ふ御社	四
▲大宮人 杜の下露 かしらかたく	同	岩神社		石神の森の紅葉、散敷て木の間に残る在明の月 庵を結ひて久しく籠ける人に云つかはしける	五
▲山野小野の秋つ 鹿月花薄 日蔭草	同	石蔵		世をいとふ人の心や動なき岩くら山に年をつむらん	六
▲烟霧水室 鴛卵花苔菴	同	石影	哀傷	朝夕に烟たゝすは岩陰に住人ありと誰かしらまし したひ侘ぬ泪も黄なる泉川いつみしまゝの長き別そ	七
▲みかの原月里 千鳥御祓水鳥	同	泉河		石河や花田の帯か空の色を移して細き水の流は <small>三才</small>	八
▲花田帯御祓 瀬見小川逢瀬 <small>三才</small>	同	石川		八千草の花の八重垣作らなん行かふ人のしけきいつもち	九
▲千種の花 一説播磨ノ シカマ川ト云々	同	出雲道		名のみしてかり屋もみえず市川や風にし波は立さはけとも	一〇
▲雨山水 蛙遣火	同	市川		今里はまた住なれぬ程なれやさせる柳の枝もみしかき	一一
▲すくせ おこしの櫻月	同	今里		神代より流出たる水ならし其名を聞もいさなみの瀧	一二
▲尾上嶺高根 紅葉榊	大和	伊駒山		足はやきいこまの山の嶺の雲幾里かけて時雨行らん	一三

▲神風 塩風 同
 ▲霞 鷹 同
 ▲鮎田 鶴貝 同
 ▲釣舟 細石 同
 ▲霞 みるめ 同
 ▲月 蟹 同
 ▲春の 月池 同
 ▲磯菜 衛 同
 ▲伊勢 人 同
 ▲津嶋 よりかい 同
 ▲川行 は 同
 ▲松 同
 ▲うき 嶋の山 同
 ▲原 時雨 同
 ▲紅葉 櫻 同
 ▲鯛釣 蟹 玉藻 同
 ▲みさこ みる 同
 ▲玉藻 船崎 志摩
 ▲鯨 鷹 志麻 同
 ▲我まよはすな 同
 ▲うるの 世を 同
 ▲いつくさの あひう 同
 ▲たれたる なたつ 同
 ▲もの 同
 ▲鷹 眞菅 友千 同
 ▲鳥みをつくし 同
 ▲浪の 音 同
 ▲松の 嵐 同
 ▲塩 風 同
 ▲清見 か崎 同
 ▲松 同
 ▲こぬみの 崎 同
 ▲嶺 岩つし 同
 ▲花駒 なつむ 同
 ▲まかなし み 同
 ▲ぬらくは ならく 同
 ▲白玉 小菅 同
 ▲笠にぬ び 同
 ▲よる 瀬 同
 ▲いくせを へてか 同
 同 伊勢 濱
 同 伊勢 海
 同 伊勢 嶋
 同 一志 浦
 同 泉 野
 同 池 浦
 同 去来 見山
 同 磯等 崎
 志摩 伊良 廣嶋
 参河 出生 寺
 遠江 池田 里
 同 引佐 細江
 同 伊間 浦
 駿河 庵 原
 同 庵 崎
 同 磐城 山
 伊豆 伊豆 高根
 甲斐 伊豆 高根
 相模 板 野
 色 川

又も来て旅ねやせまし夏の夜の月に折しく伊せの濱荻
寄玉戀 物思ふ我やいせおのあま衣たえすも袖に玉をひろへは
片戀 なとや思ひあはひの目を拾ひけん我いせ嶋の海士の袖かは
 おなし名の花かと見えていちしろく一志の浦によする波哉
 夜をこめて旅の宿りをいつみのゝはらひもて行道芝の露
 浮嶋の松のしら雪心して吹なはらひそ池のうらかせ
 乗駒もいさみの山を跡に見て帰る家路の妹をしそ思ふ
 かくて憂身とは思はし釣つり乗るいそらか崎のあまも有世に
旅宿 かりてほすめなれぬ旅の宿り哉いらこか崎の蟹の笠屋は
 きかはやないつる思ひの家を出て生るゝ寺の松風のこゑ
 底深き池田の里と成にけり船こそ通へ五月雨のころ
寄江戀 かひもなくいなさ細江のみをつくし身をこそつくせ浅き戀ちに
 いまの浦を漕もはなれす待人のあはれはそ帰るあまの釣舟
 沖つ波立にけらしも庵原の松の梢にさはくゆふ風
待戀 庵崎のまつ夜つもれる白雪はこぬみの濱に消や果まし
聞時鳥 待夜をやさすか過さぬ時鳥いはきの山の岩木ならねは
 風吹はいつの高ねに立まよふ雲も残らぬ月のさやけさ
 吹風もいた野に生る菅の根の長夜いかて爰に明さん
 紅葉ゝのなかれぬ水も色川と名にや夕日の雲そうつれる

▲月千鳥	下総	庵崎	日も暮ぬ此庵崎に宿かりて角田河原をあすや渡らん	三
▲角田河原	近江	弥高山	皇のめくみも深き御代なればあふきても猶いや高の山	三
▲神鯉 旅行人	同	不知也川	都思ふかりねの夢もいさや河いさとき夜はの床の山風	三
▲郭公相坂の 關のあなた いさや川	同	伊保乃井川	すみなせるいはの井川の月清み水も浮世の流なれとも	三
▲國もせに	同	石山	石山や深きねかひも水海にうかふ斗のしるしともかな _{「ア}	三
▲緋嶺花	同	石邊	うら枯てたてる蓬の直ならぬ石へかはらの道そ過うき	三
▲横田山を讀合 たり秋風寒み	同	岩清水	_{水邊納涼} 岩清水むすふあたりの涼しきは夏をとをさぬ逢坂の関	三
▲相坂山の岩 清水と讀り	同	岩根山	雲おこる岩ねの山の山風に降こん雨そかねてしらるゝ	三
▲池若松藤 山吹鴨鶴	同	岩戸山	雲とちてとこやみの世に帰るかと岩戸の山の五月雨の空	三
▲神鹿霧	同	五十師嶺	花にふす枕の夢も覚にけりいそしの嶺の曙のそら	三
▲白妙の花	同	板目山	しら菊のまたき移ふいため山いたくな置そ秋の初霜	三
▲時雨まゆみ	同	伊吹山	玉かつら伊吹の山の面影に散ても残る嶺の紅葉ゝ	三
▲さしも草嶺 紅葉櫻子規	美濃	伊津貫川	_{物名} ぬる夜なきいつ貫川の波枕猶聲そへて田鶴そ鳴成	三
▲雪千鳥	同	犬飼御湯	ますらおは遠く山ちの狩にいぬかひのみ雪やいかに分らん	三
▲雪田鶴	同	伊那郡	いや遠く隔たる中は信濃なるいなやたのまし人の詞も	三
▲山箒鷹	信濃	伊香保沼	かりこもの思ひみたるゝいかほ風いかなるつてにかくとしらせん	三
▲雪鳥の子	同	石垣沼	_{寄沼戀} いかにせん岩かき沼のうへこなきつまぬ袂もぬるゝ戀路を _{「ア}	三
▲信濃なる いな那郡	同	磐手	ことに出ていはての山の紅葉ゝも色にそみゆる秋は限りと	三
▲根うるこなき あやめ杜若	上野	磐井	_{水邊納涼} 夏衣日もくるゝまで袖ひちて結ふ岩井の水やこほれる	三
▲蛙蟹水鳥	陸奥			三
▲杜若澤標	同			三
▲忘水秋月 _{「ア}	同			三
▲杜岡關里山	同			三
▲山吹時鳥横	同			三
▲里水草	同			三
▲圓居して	同			三

- ▲角さはふ 石見
- ▲ふかみる 石見海
- ▲花ちる 同
- ▲月そいさよふ 石見野
- ▲目 同
- ▲住吉の神三ツウ 同
- ▲石見の川の身を絶す戀 同
- ▲山花三ツウ 同
- ▲木立のしく 播磨
- ▲野川海嶋 同
- ▲浦淺茅萩 同
- ▲なのりそ櫻 同
- ▲千鳥月 同
- ▲朝夕に 同
- ▲定なき世を 同
- ▲濱泊山 同
- ▲友千鳥鶴 同
- ▲はりまかた 同
- ▲舟子の聲 備中
- ▲雪ふれば 同
- ▲いや高山の梢 同
- ▲また二葉なる 同
- ▲石崎の松 同
- ▲いなおほせ鳥 同
- ▲あたらん人には 同
- ▲波のぬれ衣 安藝
- ▲家人草枕 同
- ▲旅行鶴三ツウ 同
- ▲岡濱森岸 周防
- ▲結松かやね 同
- ▲野への下草雪 紀伊
- ▲浦濱に住虫 同
- ▲神嶋鳴神嶋 同
- ▲川麻衣鷹金 同
- ▲細谷川橋玉篠 同
- ▲せの山にたくに 同
- ▲むかへるいもの山 同
- ▲戀 同
- ▲よせくる浪の 同

- 妹山
- 妹背山
- 磯間
- 磐代
- 祝嶋
- 龍嶋
- 板倉橋
- 石崎
- 弥高山
- 出崎
- 揖保湊
- 生嶋
- 家嶋
- 印南
- 活道
- 石見川
- 石川
- 石見野
- 石見海

寄海戀 いかにとも人にしらせんいへはえに石見の海の深き思ひを
花雪 春風もそゝるに寒き石見のや雪ふみ分る花の下道
哀傷 石川のかひこそなけれなき人の形見の雲を見つゝ忍ふも三ツウ
寄山戀 今更に何かいはみの川はやみ早く契しことなわすれそ
見花 めかれせず見るともあかしいくち山幾千世までの花の盛を
野花露 めるゝ共枕からましいなみ野の尾花の露に袖をかはして
海邊 藻塩焼烟たちけりあら磯もわか家嶋とあまの住らん
 いき嶋にいきてすまゝし名にしおはゝ老す死なすの薬有やと
 聲そへよいほの湊の泊舟なれたにうとき友ちとりかな
春雪 くるしさをよそにしらるゝ海士小船出崎めくる漁火の影
 春来ても嵐を寒みけぬか上に猶ふる雪はいや高山の山
 岩に生る種はあり共石崎の松の姿のたくひやは見ん
 乗駒のあやうく見えし夕闇にかちより渡るいたくら橋
 見なれはや我思ふ人はいつくしま波のぬれ衣よしやきるとも
三ツウ 細石によそへて君をいはひ嶋我も巖の末を見んまで
寄海土戀 岩代の松の下草かり初に結ふ枕もとけてねられす
寄山戀 かく計いそまの浦に網引する海士の袂もはず隙やなき
寄山戀 幾度かふみ見てたにも迷ふらむいもせの山の道やはるけき
 妹山の名をなつかしみ一夜ねん岩ねに生る菅枕して

- 一〇八
- 一〇七
- 一〇六
- 一〇五
- 一〇四
- 一〇三
- 一〇二
- 一〇一
- 一〇〇
- 九
- 八
- 七
- 六
- 五
- 四
- 三
- 二
- 一

- ▲うきみる 嶋舟
- ▲田鶴 瀧かり舟月
- ▲松かね 夕涼み
- ▲山嶺岡松 鶴
- ▲藤波 五月雨
- ▲木むら をみの木
- ▲ゆけたの数は左八
- ▲右は九中は十六
- ▲湯わかせ子とも
- ▲檜橋よりきつに
- ▲濱塩やく 蟹
- ▲しき波戀シマツ
- ▲三笠なるいは
- ▲ふみ川に駒泥む
- ▲嶋一下紐
- ▲つなて繩船
- ▲宿りする君
- ▲家人の
- ▲杜瀬をはやみ
- ▲我駒つまつく
- ▲竿鹿 尾花
- ▲雉子散かふ花
- ▲嶺著鷹
- ▲時雨紅葉
- ▲つくはね
- ▲寺鳥の音 藤花
- ▲菩提の種 嵐坂越て
- ▲厩金駒坂越て
- ▲泉川 嵐吹響
- ▲の夕くれもみち
- ▲竹の下道 時雨
- ▲家の風 郭公
- ▲杜の翠 なげき
- ▲山檜原 川道

- 同 伊那瀧
- 同 妹賀嶋
- 同 岩根岸
- 同 今 来
- 伊与 射狹庭岡
- 同 伊豫湯
- 同 櫟 津
- 同 石城嶋
- 筑前 石踏川
- 同 怡土濱
- 壹岐 石田野
- 未動 出入河
- 同 入 野
- 同 入日岡
- 同 伊奈岡
- 山城 花 山
- 同 柞 森
- 同 羽束師 杜

流あふ末をそ頼むいな瀧のいなてふことはゆゝしけれとも
 都出て忘れもやらぬ妹か嶋きは千鳥も妻やこふらん
 わかしめし所ならねは有へんとえこそいはねの岸の松陰
 子規今きの岡の名もしるく鳴やう月の聲もほのかに
 待出しさいさよひの月もいさ庭の岡のこむらに又やかくろふ
 待戀 幾婦りいよのゆけたをかそふ共待に來ぬ夜の數にまさらし
 いとはしないちるつならて思ふとち圓居する夜にきつは鳴共
 浪かくる岩きの濱のはま庇久しく見ても面かはりせずシマツ
 是もうき世中なれや駒なつむ石ふみ川を渡りかねつる
 心ほそき旅にもあるか船つなくよるへと頼むいと鳴へを
 露の玉袖につまんいはた野の散なん萩の花の形みに
 駒とめて水やかふらん打渡す遠近人の出いりの川
 旅人の入野の原の手杖に薄かうれの秋は來にけり
 狩人の入日の岡に鳴雉子かくれ所も淺きしの原
 いな岡のいなや思はしつくはねのしけきなけきも夢の世中
 葉

- 二〇九
- 二一〇
- 二一一
- 二一二
- 二一三
- 二一四
- 二一五
- 二一六
- 二一七
- 二一八
- 二一九
- 二二〇
- 二二一
- 二二二
- 二二三
- 二二四
- 二二五
- 二二六
- 二二七
- 二二八
- 二二九
- 二三〇
- 二三一
- 二三二
- 二三三
- 二三四
- 二三五
- 二三六

花山の散にし春の名残をも忘ねとてや鳴郭公
 泉川行舟ならて秋は又はその杜の色そこかるゝ
 花さかて我心さへはつかしの杜の木葉のふり果る身は

▲鹿白露 秋はたつらん
 ▲霜枯 五月雨
 ▲駒 三川の沢の八橋
 ▲海浦川 蝦
 ▲東路橋 柱 霞
 ▲鷹 騎 駒
 ▲大井川を 讀
 ▲合せたり
 ▲むかしを 思ふ
 ▲波の音 梢
 ▲たかし山 月
 ▲鶴の橋下
 ▲すむ里人の 心
 ▲霜枯 川霧
 ▲原嶺 おろし
 ▲鹿 枝折
 大和 泊瀬
 同 波尼夜須
 同 羽易山
 撰濱 濱松岸
 同 羽束山
 同 橋下寺
 同 原池
 同 原山
 伊勢 濱村
 同 針河
 参河 花園山
 同 萩山
 同 原野沢
 遠江 濱名橋
 同 初倉山
 同 濱松里
 同 橋下
 同 腹川
 駿河 端山

山寺樓曰
 古を聞もたのもし泊瀬寺我日本に生れ来る身は^トオ
 又も出ん影そと思へとはにやすの池にし月のかくるはおし
 子を思ふ聲も哀に鳴雉の羽かひの山はこゝろしてやけ
 夕涼みかゝれとともや濱松のきし方の世に誰かうへけん
 月影のはつかの山のつかの間に明るもおしき短夜の空
 くらき道にまよはん人や渡すらむ橋下寺の法のともしひ
 吹風の跡こそみゆれ方分て氷とちぬる原の池水
 聞のひまもしらむとみればさゝのやに音せて雪のつもる原山
 置霜もまた深からぬ濱村に立や朝けの煙なるらん
 はり川の岸の青柳雨ふれは糸にいとをやより合すらむ
 人心の花園山の春の色も移れはかはる嶺の紅葉に
 咲花の枝もたはゝに萩の山風をそけにもをける露哉
 尋ても草の原野の沢水をむすひし後とははさらめやは^ヲ
 心ある濱名の橋の海士小船さして今夜の月や見るらん
 今朝よりは草葉に置く白露もあらはに秋の初くらの山
 濱松の風寒渡る里遠みふらぬ時雨に袖やぬれまし
 七夕のけふのためとや鶴の橋もとかけてむれわたるらん
 腹川の中に小河のはらむらん流そひろき五月雨の比
 評語
 ふしのねの雲間もりくる春の日には山かすその雪の村消

一三七
 一三六
 一三九
 一四〇
 一四一
 一四二
 一四三
 一四四
 一四五
 一四六
 一四七
 一四八
 一四九
 一五〇
 一五一
 一五二
 一五三
 一五四
 一五五

▲沖唐人
舟出追風
▲里濱風
時鳥思草
▲嶺あまくたる
天の御孫の國
▲みそれ降
板間風

博多
速見浦
速日
旗野

暮ぬれはいそへの松の聲添ぬ吹やはかたの沖つ塩風
外よりは長閑なるらし玉椿はやみの里の花の春風
かきりなき今行末の世を照すはや日の嶺に光とゝめて
音もせぬ雪にやよるの床寒みはたのゝ風は吹すさめ共

一六
一七
一八
一九

▲鳴瀧御殿
御幸鶴の毛衣
おつる月影

西河

西川や清き流にいくしたて幾世の人か御殿じつらん

一六

▲買しきぬ
▲川檜山仙人
斧五月雨
汀氷鎮なかつ

西市

いささらは西の市にも出なまし我ぬれ衣を人のかふやと
さそふ水あらはと頼む仙人の宮木そつもるにふの山川

一七

▲春の柳
▲梅の花
▲西の海風祭り
柴小舟
えひすさからふし元オ

西大寺

青柳の糸につらぬく白露は思ひの玉か西の大てら
世を照す月は入ても猶西の林に残る法のともし火

一七

▲春曙 色をつ
くしてよる貝

西宮

足たゝぬ我を見そなへ西のみややまとことゝみまくほしきに元オ

一七

▲沖川舟玉藻
鶏花ちる月
菊瀧水あま

湖海

是や夜のにしきの嶋か立こむる霧に紅葉の色し見えねは
塩やかぬ浦とはいはし春霞たつは煙に湖の海つら

一七

▲やはらくる影
やゝ立まさる
御たからの

二宮

とく法の道は思はてあちきなく此世にのみや心つくさん

一七

▲岩根の枕
妹

新井里

民の世も更ににきはふ時なれや新るの里にたてる煙は
うらかるゝにゐたの山の草枕むすへは結ふ袖の露霜

一七

▲まかねふく
郭公

新田山

さひしやと思ふ夕の一こゑは何かはにふの山ほとゝきす

一八

▲清き瀧 穂散
山下水

丹生山

古郷にきて帰るてふにしき川わたらは我も名にやあへまし

一八

▲その立山に
雪降しきて

新河

にゐる川の河瀬の霧やたち山に降しく雪の色にまかへる

一八

新河

一八

▲かつかぬ螢は
 ▲御調物はこふ
 ▲よをろ作る田
 ▲若菜布せらす
 ▲千年の影
 ▲青柳
 ▲船のり
 月レウ
 ▲君か代二たひ
 ▲すめる瀬ゝの
 ▲みくる
 ▲橋松浦舟
 ▲都鳥蛙貝
 ▲螢あやめ声
 ▲住吉澤標
 ▲芦江氷海士
 ▲鶴のわたる
 ▲しるし
 ▲七夕いせの海
 ▲波枕濱風
 ▲あつたの方の
 ▲いさり火の
 ▲相坂の鬮駒
 ▲花薄女郎花
 ▲武藏野夏草
 ▲井筒
 ▲氷わたる
 ▲筏の棹
 ▲きひの中山
 ▲散つもる花
 ▲螢夏虫水
 ▲神のちかひを
 ▲しるへにてレウ
 ▲五月を待て
 ▲葉かりつかふ
 ▲るときに
 出雲
 錦浦
 備中
 二万里
 安藝
 新田池
 伊予
 熟田津
 山城
 堀河
 撰津
 堀江
 同
 細江
 伊勢
 星川
 同
 星合濱
 尾張
 星崎
 甲斐
 穂坂小野
 武藏
 堀兼井
 丹波
 保豆山
 備中
 細谷川
 紀伊
 發心門
 大和
 平群山

白波のとるてふ物を船人よ錦の浦は心してゆけ
 君か代の民の家ゐやにまの里猶いやましに数やそふらん
 春風になひく柳の枝たるゝ末は新田の池のうき草
 にきたつに船のりすれはうき旅の心もなきぬ月の夜かけてレウ
 保
 九月十三夜
 名も清し二たひすめる堀川の水やこよひの月にたくへる
 橋レ船
 船ならてこかれそ渡る津の国の堀江の橋によるの螢は
 我思ふ人としいつか住吉の細江の波に身をつくしても
 晴る夜の空をうつして底清み名に流たる星川の水
 星合のはま松風や手向草今夜しらふる聲にかよへは
 遠よりも見ればさなから星崎や浪間にうかふ漁火の影
 草を淺みかくるとすれと我戀はほさかの駒の荒てみゆらし
 濁なき心の水の出かたき堀かねの井や我身成らん
 都よりみればあたこの南なる月の入さやほつ山の峯
 氷る夜は細谷川の音もせず風こそ寒れきひの中山
 信ある心をおこす門出には先幣取て手向こそせめレウ
 邊

一八三
 一八四
 一八五
 一八六
 一八七
 一八八
 一八九
 一九〇
 一九一
 一九二
 一九三
 一九四
 一九五
 一九六
 一九七
 一九八

へくり山五月を待て葉かりかりの浮世を渡るたつきに

▲山杜林里二
 ▲葉の松時雨
 ▲葉推柴鹿
 ▲山田里渡白鳥
 ▲の松鴨鶴
 ▲川瀨山岸
 ▲花萎紅葉
 ▲御波う舟袋
 ▲時鳥忍ひもあへぬ
 ▲山野煙鈴蛇
 ▲霧無を送る
 ▲里千年住へき
 ▲水にやとれる月
 ▲山川野蟹小船
 ▲かくらうの
 ▲花氷雪嵐
 ▲野原若菜莖
 ▲早蕨雲雀
 ▲みをつくし
 ▲あやめ草月
 ▲龜井の水ニッソ
 ▲寺竹苔鐘
 ▲榎葉井鐘
 ▲花こはれる箱
 ▲里山嶺村
 ▲かやり火霧櫻
 ▲搦衣紅葉
 ▲吉野の漣雪
 ▲駕五月雨水
 ▲御波衣うつ
 ▲川霧霰
 ▲旅人朝ぼらけ
 ▲堤むかひに
 ▲崎磯田鶴
 ▲千鳥玉藻舟
 ▲鶯紅葉月
 ▲住吉真秋
 ▲霧松虫搦衣
 ▲時鳥雪莖
 ▲霞
 ▲高瀬の船
 ▲宮柱

山城
 常磐杜
 鳥羽
 戸難瀬
 隣岡
 鳥邊
 常磐井
 泊瀬
 飛火
 富緒川
 豊等
 十市
 十津川
 轟橋
 通河
 富嶋
 遠里小野
 鳥養
 豊宮

登

樹上蟬
 空蟬の聲のあやなき時雨哉ときはの杜の色もかはらて
 山城のとはに吹ぬる山風も今朝しも秋と身にやしむらん
 嵐吹嶺の紅葉、散ぬなりとなせの瀧もよとむ計に
 一しほの緑や年をへたつらん春の隣の岡への松
 歳暮
 空にまたたゝぬ計そ鳥へ山我身もつるの煙と思へは
 いつとなき水の碧は常磐井の月の色のみ秋を知らん
 春の花秋の紅葉はおしめ共いつれとませの川のしからみ
 こと問ん野守も見えぬ飛火野に雪かき分て若なをそ摘
 外に又何か求めんたくひなき富のを川の秋の夜の月ニッソ
 降雪は埋む物から寒渡るとよらの寺のあかつきのかね
 名所搦衣
 夕立の音聞えしはきのふかも十市の里に衣うつなり
 時雨つる跡猶くもる吉野山とを津川上雪やふるらん
 寄橋懸
 人をもみ戀渡る身のむねの内はと絶もあらぬとゝろみのはし
 一しくれとをりの川の河長や船さしとめて晴間待らん
 移来る聲もとしまか磯衛こなたかなたの波に鳴也
 草花先秋
 月影も秋をまたてや住吉の遠里小野に真萩咲らん
 物名
 いかにかうき高瀬さしこす舟人のさほとりかひの隙もなき身は
 何となく豊の宮居の神さひてぬさ取あへぬ袖のしら玉

一九
 二〇
 二一
 二二
 二三
 二四
 二五
 二六

- ▲皇の天つみ同 飛幡浦
- ▲おやの志摩 斗具三嶋
- ▲郭公五月雨尾張 床 嶋
- ▲長柏尾張 嶋
- ▲ひとりぬる夜相模 刀比河内
- ▲よするなみた三常陸 鳥羽淡海
- ▲あしかりのとひ常陸 鳥籠山
- ▲湯の近江 烏籠山
- ▲にひはりの近江 烏籠山
- ▲白波たちぬ近江 烏籠山
- ▲近江路の鹿同 床 浦
- ▲鶉五月雨同 遠津大浦
- ▲駕旅の枕同 取古池
- ▲あまのかる藻同 常夏里
- ▲あられふる同 土岐郡
- ▲よる波の同 刀根河
- ▲鳥の音同 十府浦
- ▲あし鴨同 戸絶橋
- ▲からなてしこの同 刀奈美山
- ▲旅人草枕美濃 刀奈美山
- ▲雪降下紐上野 常磐山
- ▲石ふむ道陸奥 豊岡里
- ▲小夜千鳥同 常磐山
- ▲七ふさひしき同 常磐山
- ▲野田の松嶋同 常磐山
- ▲菅こも同 常磐山
- ▲丸橋月同 常磐山
- ▲關手向の神丹波 常磐山
- ▲松雪時鳥備中 常磐山
- ▲やきたちのとなみ備中 常磐山
- ▲色かへぬ榊葉備後 常磐山
- ▲時雨雪の深さ備後 常磐山
- ▲時にあふ民の心備後 常磐山
- ▲御代のはしめ備後 常磐山
- ▲室の木備後 常磐山
- ▲嬬小船備後 常磐山
- ▲月磯の室野長門 常磐山
- ▲忘貝ひろふ長門 常磐山

時鳥とはぬとはたのうらみをもはるゝ計の聲を聞はや
夏しらぬとくのみ嶋のひろ柏廣き恵の陰にかくれて
人とはてわたつみとのみ荒まさる我床嶋の嶋鳥そうき」三〇
誰とてかとひのかうちに出るゆの身にわかかへる思ひあれ共
つくはねの紅葉散しく風吹はとはのあふみにたてる白浪
吹たひに聲打しきる夕暮は秋やうつらのとこの山風
長夜もむすはぬ夢を覚すらむ月にうきねの床のうら風
露中懸 故郷は遠津大うら恨めしく思ふ中をも波路へたてゝ
無名をしとりこの池に住鳥も音にたてゝ社人にしられぬ
花咲てちりをゐさせぬ床夏の里はあしたの露なはらひそ
別来ておほつかなきに妹か紐とときの郡と聞そうれしき
とね川の石ふむ道も通はまし末に逢瀬の有と聞なは
ふみにねて七ふをいかにすかこものとふの浦風寒渡る夜に
恨をもいひな渡りそ假初のとたえの橋の絶やはつらん
世間の人の心のとなみ山關とはなしになにまもらん」三二
たにはちの名にこそかはれときは山時雨の比も猶緑にて
とよ岡の里そさかふる御幣を手に取持し神のなゝれは
ともの浦の磯への月を見るのみそはるけき旅の取所なる
時の浦と名には立れと時にあはぬ身はあさりてもかひそなかりき

▲松か浦
帰る浪

讃岐
泊 磯

▲我庵は
軒もる月

土佐 山

▲阿波の鳴門
田に作るまで

同 土佐海

▲あらひきぬ
川淀

筑後 取替川

▲撫子の花ふさ
手折

未勅 跡見岡

▲薬に住虫
山越へ

同 床 海

▲岩つゝし
柴かりみたる

同 遠津濱

▲霞はし鷹
秋の月三才

同 等夜能野

▲嵯峨の山雪
子日若菜

山城 千代古道

▲望月駒紅葉
御幸夏草

伊勢 千尋濱

▲伊勢海真砂
貝君か代

上総 千草濱

▲霞貝塩風
篠の宿若

近江 千々松原

▲皇をいのる
君か代

同 千束橋

▲はこふ御調
神葉豊明

同 千枝村

▲ゆふして藤
あけの玉垣

同 竹生嶋

▲まかきの嶋
武士袖に波

陸奥 千賀塩竈

▲こす
君か代を折る

丹波 千年山

▲霞花みつ垣
岩尾若細石

出雲 千酌濱

▲風なきに
おきの嶋みゆ

同 千酌濱

松か浦に幾夜泊のいそくとも拾ひてゆかん戀忘貝

さすらへし世は浮舟に法の師の土作の山風身にやしめ劔

こく船はあはのなるとを離れてもまた波高しとさの海つら

名にしおはゝ取かへ川におり立て浮を嬉しきせにもなさはや

夏にしも入もあへぬに咲つゝくとみの岡へのなてしこの花

程もなく荒にし床の海と成て吹あへぬ風に袖のあた波

又もこん遠津の濱のとをく共つゝしの花の春くれぬ間に

霜ふかき鳥屋野を分て昨日よりけふも狩はに日をやくらさん三才

知

さかの山雪のふる道埋れて千代のしるしに松そ木たかき

なかき夜を思はゝ海士のたくなはの千尋の濱の貝もひろはし

いさきよく色をましへて秋のゝにまさり千種の濱の真砂は

子日せし始もしらす行末も幾万代そちゝの松はら

徒にくちてたてれば錦木をはこふちつかの橋はしら哉

手向する千枝の村の榊葉や立さかゆへき世をあふくらん

ちくふしま嵐も清き旅ねには夢も浮世の夢はむすはし

春もはやちかの塩かま立のほる烟も空の霞とそ見る

かきりなき君か齡にくらへなは千年の山も麓ならまし

をきの嶋に通ふ船こそやすからしちくみの濱のあらし波風

二三六 二三七 二三八 二三九 二四〇 二四一 二四二 二四三 二四四 二四五 二四六 二四七 二四八 二四九 二五〇 二五一 二五二 二五三 二五四 二五五

▲岩代の松
霞月秋風三ッ

紀伊
千里濱

袖に入る物にしもかなもていなん千里の濱の岩とかしはを三ッ

二五四

▲真砂海霞
蟹のたく糺月

同
千刃濱

風にちる真砂の数もしられまし千刃の濱の秋の夜の月

二五五

▲分て行糺
時雨

同
千草嶽

時雨するちくさの嵩に白雲を染残さしと夕日さすらん

二五六

▲みるめ千鳥
唐もちかの霞

筑前
千賀浦

寄舟懸
こかれ行舟路はさてもちかの浦を心つくしの波そへたつる

二五七

▲塩けふり
いにしへの光に

同
鎮西

世をすくふ深き恵は有明の光しつむる西の海つら

二五八

▲まさる王垣
我君の

筑後
千年河

水上に松の雫のつもりてや千年川とは名に流るらん

二五九

▲紅葉行舟の
句ひにめて

對馬
千良布山

限あれはちらふ山邊の紅葉のこかる程そ色もこかれめ

二六〇

▲時をえて
早苗とる

未勸
千田村

早苗とるちたの村人袖ぬれてはず間もあらぬ五月雨の比

二六一

▲たちぬはぬ衣
山姫ちる櫻

大和
龍門

むかしより埋れぬ名の流れり鯉てふ魚ののほる瀧波

二六二

▲川山姫麓
五月雨梅藤

摂津
布引瀧

たちぬはぬさきにはつる白糸やさも弱からし布引の瀧

二六三

▲呼子鳥月水
神代より

常陸
沼尾池

沼の尾の池の蓮の花の上を見るにもゆらく露の玉のを三ッ

二六四

▲絶ぬや深き三ッ
秋柏朝柏

未勸
潤和河

秋のたつ朝けの露の玉柏ぬるや川への宿り涼しも

二六五

▲底なる玉は
もとめつ

同
沼名川

何せんにかかたき玉もぬな川の只水の上のあはれ世中

二六六

▲山川瀧花霞
谷水かほ鳥松

山城
音羽

音羽川をとも聞えず氷るせの春と計に霞む山の端

二六七

▲鳴神五月雨
山岩菜小松原

同
小塩

小塩山小松か原も十かへりに咲かともゆる霜の初花

二六八

▲大原雪子規
鹿嶺内野櫛

同
小藏山

暮山紅葉
よそはや小藏の山の紅葉を暮るもしらて詠つる哉

二六九

- ▲郭公霧薄
- ▲山谷山田早苗
- ▲山花炭雪
- ▲鹿推柴
- ▲浅茅
- ▲おほみあしち
- ▲秋萩
- ▲駒日野櫃し
- ▲川橋
- ▲我國の敷のこほり
- ▲大宮とこ
- ▲櫻春雨瀧上
- ▲白雲の立田の山
- ▲宮川板田橋
- ▲夢浮橋 妹一三ッ
- ▲五月雨猪名
- ▲しなな鳥風
- ▲若水君か代
- ▲百万代の春
- ▲湊伊勢海松
- ▲御萩船かけるふ
- ▲瀧あはての社
- ▲郭公
- ▲妻戀るをしかの原
- ▲秋の白露
- ▲里杜時鳥藤馬
- ▲松宇津の山卯
- ▲花薫下道
- ▲つるふちの駒
- ▲薄へみの御牧
- ▲春草
- ▲池前玉の鶉霜
- ▲山鳥の秋の月
- ▲逢事を苗代
- ▲水月
- ▲武藏野萩
- ▲子規山のかひ
- ▲さ衣のをつくは
- ▲ねろの立鳥二四〇
- ▲露草駒

- 同 小野
- 同 岡崎
- 同 岡屋
- 同 愛宕里
- 大和 小鞍嶺
- 攝津 小墾田
- 同 小篠原
- 伊勢 忍穂井
- 同 小野古江
- 尾張 音聞山
- 同 小鹿原
- 同 岡部
- 甲斐 小笠原
- 武蔵 小崎沼
- 同 小山田関
- 同 岡部原
- 上総 音信山
- 常陸 小筑波
- 同 小野御牧

野徑夏草
踏分て雪にはとはしをのゝ奥の道もなき迄茂る夏草

萩か花咲そみたるゝ岡崎の道行人の袖匂ふまで

世中は人に心を岡の屋に立よる程の宿りなれとも

ひらけ初し花の都そさかへぬるをたきの里はときはかきはに

咲花に小倉の嶺や唐錦立田の山は中たゆれとも

古へのさそとしらるゝ跡もなし名にのみ残る小墾田の宮二三

かるもかくるな野もいこそやすからねをさゝか原の風さやく夜に

天よりも神のもて来しをしほ井の水もや深き恵ならまし

名にしおはゝ萩にや花の咲なましをのゝ古江に秋はききにけり

鳴捨てゆくは中々時鳥音聞山の名たて成らむ

なげやなげをしかの原の草枕とてもねぬよの友と思はん

薫楓分つゝ来れば夕附日さすや岡への里そまちかき

春草の萌出にけりをかさ原おひたる駒もいさむ計に

陸にすむ心ちこそせめ水鳥のをさきの沼をとつる氷は

見る程もなはしる水にすむ月の影をとゝめよ小山田の關

むさし野の草のゆかりの色に咲岡への原の秋萩の花

時鳥わきてそ嬉しさひしさを音つれ山の初音と思へは

わか思ふ中のさはりやをつくはの茂き木の間の月を見ること二四〇

寄駒戀
しらせはやをのゝみまきの荒駒も終には人になれ行物を

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------------------|---------------------------|---------------------------|------------------------------|-------------------------|-----------------------------|--------------------------|------------------------|---------------------------|---------------------------|---|-----------------------------------|---------------------------|-------------------------|------------------------|-------------------------|------------------------|--------------------------|-------------------------------|------|------------------|
| ▲山淺茅生
夢旅ね | ▲山杉霧籠
日吉の神三輪山 | ▲紅葉時雨 | ▲はし鷹 | ▲月更級卯花
霞旅都思ふ | ▲つと歩板 | ▲東路月引駒
山鳥のをたえ | ▲浦磯千鳥櫻
海士漁松嶋 鷹 | ▲海士時雨
擣衣時雨 | ▲池婦鷹
五月雨 | ▲海士の宮屋
秋の月 | ▲芦糸く鮎つる
ねしろ高かや _{二三} ウ | ▲花芦鴨霞 | ▲藤浪有磯浦 | ▲浪聞わり
入船の | ▲里苗代月 | ▲松風治る世 | ▲月 | ▲楨苔月
夕立草露 | ▲友千鳥 | ▲川里瀧の白玉
螢擣衣雪水 |
| 近江 | 同 | 同 | 美濃 | 信濃 | 陸奥 | 同 | 同 | 同 | 同 | 越中 | 同 | 同 | 隱岐 | 備中 | 同 | 紀伊 | 同 | 同 | 同 | 同 |
| 小野 | 小比叡 | 小山 | 尾総橋 | 姨捨山 | 小川橋 | 緒絶橋 | 雄嶋 | 抑 関 | 小塩浦 | 雄神川 | 雄神川 | 平布崎 | 隱岐凌 | 小田渡 | 雄琴里 | 姨 嶺 | 緒捨山 | 小江浦 | 音無瀧 | |
| 袖はかくぬるゝ物かは都出て幾日もあらぬ小野の旅ねに | 四方に香の匂ふをひえの過し世にかはらぬ法の花の春風 | ふむはおしよき道もかな秋暮てを山の里につもる紅葉ゝ | なれたにもこゝるにはなるゝ箸鷹のをふさの橋やかけて頼まん | なくさまぬをは捨山の山人に今夜都の月を見せはや | あゆみ板も人もかたみにそむかすは小川の橋のと絶あらめや | 思ふ事聞しる友のなけれはや琴の緒断の橋といふらん | 都にて秋の空にも思ひ出んをしまか磯の有明の月 | 鷹金をいかてをさへの関も哉春には帰るならひなれとも | 旅ねせし袖にやとるをふり捨て行はをしほの浦の月かけ | なかゝれと思はゝ玉のをかみ川瀬ゝにさはしる魚なすくひそ _{二三} ウ | をふの浦の松にかゝれる藤波のなみにみるへき花の陰かは | いかにせん都へ帰るつてもなしをきの湊に舟はあれとも | 夜寒そふ比はかりほも守捨て小田の里人衣うつなり | 村雨の音もみたるゝ白露の玉のをことの里の夕風 | さらしなと思ふ計そをはか嶺今夜くまなき月の光は | 梓弓をすての山の楨の葉も春立帰る色やみすらん | かなしけに音を鳴をえの浦衛うらなく妻を戀る比かも | 夜雪
音なしにつもる白雪明は又瀧とやおちん軒の玉みつ | | |
| 二九八 | 二九〇 | 二九一 | 二九二 | 二九三 | 二九四 | 二九五 | 二九六 | 二九七 | 二九八 | 二九九 | 三〇〇 | 三〇一 | 三〇二 | 三〇三 | 三〇四 | 三〇五 | 三〇六 | 三〇七 | | |

▲朝倉
網引

筑前
織面湊

遠近にこよひ聲しけし海士人やをめの湊に網引すらしも

三〇八

▲君を析る

山城
別雷神

折くに世や守るらん四の時をわけ雷の神のめくみは

三〇九

千早振

大和
忘水

契こし人の心の忘水年をふる野の沢にはあらねと」三〇

三一〇

▲布留野沢 朝原
若菜 五月雨三三才

同
若草山

驚もねよけに聞ゆ春日の、若草山にまくらむすはん

三一一

▲鷲雉 春日野
谷の埋木 雪

同
和豆香山

ちらぬ間はめかれをもをし和つか山わつか成世に花の盛を

三一二

▲白妙に舍入装
束て我大君

同
忘水

徒に老の心は浅沢の水の名もうき物忘れして

三一三

▲住吉 淺沢小野

同
輪田御崎

見るまゝに心もすみて圓なる和田の御崎の秋の夜の月

三一四

▲五月雨 霞松

同
度會

やはらくる光を分る度會や五十鈴の川の瀬くの月影

三一五

▲入江浦 車舟
笠松都鳥 鷗

同
若松原

かき置し言の葉もけに万代に散うせすてふわかか松原

三一六

▲川 齋院 しめ
鈴鹿川 若くぬき

同
忘井

結ふ手に空行月の移るまで帰る家路も忘井の水

三一七

▲伊勢 嶋 田鶴

同
忘河

法の師の心やさそとすむ月のわをかけ山の秋の夜の空

三一八

▲納涼 岩枕
都の方の戀しき

同
和乎可鷄山

春くれはときは陰もをのつから若えつゝ見る若松の杜

三一九

▲うき人戀渡る

同
童部浦

わらはへの浦そ戀しき来し方の馴にし友の今も有やと

三二〇

▲あしかりの

同
若松森

わしの山うつす高ねの月やあらぬ法はむかしの御法ならずや」三

三二一

▲月かつの木

同
鷺山

ちかひてし人の詞を忘すの山とし我は頼むはかりそ

三二二

▲納涼 皇の末
さかゆへき 二葉

同
不忘山

今はとて別の嶋を出はなれ猶いそかるゝ帰りに都に

三二三

▲おいつしま
もる神 浪

同
渡乃山

ほのかなる影にもしるし月の船の渡りの山に秋はきにけり

三二四

▲退凡下 乘の
卒都婆 月三三才

同
別嶋

三二五

▲濱阿武 隈川

同
石見

三二六

▲わかるれとわかる
とおもはず

同
花紅葉

三二七

▲月妹か袖

同
渡乃山

三二八

鶴林御法	撰津	龜井
有明の月	同	神南備杜
龍田姫時雨	同	河嶋
野邊の錦	同	川尻
湊入江千鳥	同	柏野
草鶴枕月	同	伊賀
船のへとももの	同	伊勢
みゆる塩のはる	同	神道山
なら山の	同	鏡宮
このてかしばの	同	神代朝熊
花五十鈴川	同	海士藻塩火
百枝松圓居	同	嵐岡池朝顔
霧下紅葉	同	峰岡池朝顔
淡の小石	同	稚子鹿
すか嶋三ツ	同	冬枯の野邊
雪	同	行かふ人
花鶴篠の雪	同	葛布
山霞山梨	同	花園時鳥秋田
里屋月夜	同	忘草煙雪
花園時鳥秋田	同	塩干
呼子鳥東路	武蔵	崎浪花櫻
萩の下葉	同	呼子鳥東路
世の中に今は	同	かきりの山
かきりの山	同	崎神山宮瀉野
浦霞千鳥月	上総	常陸
常陸	同	鹿嶋
檜原杉原宮柱	一ノオ	

隨意聞法
 浮木よりあひかたきてふ法をたに龜ゐの水の絶す聞哉
 立別れ行人の為手向せん是やちふりの神なひの杜
 川嶋の水の流も音絶す氷らぬ方に千鳥鳴なり
 水を淺み船行なやむ川尻に都のちかく成ぬと思へは
 物名
 思ふ事なき身成せは沈みうくみつのかしばのうらは頼まし
 神道山あふくとをしれすゝか川八十瀬の波を分ぬ計そ
 鷹金や霞に見えぬからす崎はねに物かくためし成らむ「モヲ
 野守ならぬ鏡の宮によそなから移す心を神もしらなん
 日くるれば神崎山も見え分す里ある方やたく火ほのめく
 むね分に分行鹿もかくれのゝ猶末ふかき秋萩の花
 枯果るかやつの原に雲もなし月やいつくのくま求むらん
 かけ川の里にをるてふくす布やいとなむわさも恨成覽
 昨日までさやかに見えつるかひかねも霞渡れる春はきにけり
 かまくらや五つの山の名をとめてふみ見る人のすゝききぬらん
 かくてのみ戀渡れとも逢事はかたせの川に袖はぬれつゝ
 暮春
 東路に霞の關も有てふをいつくに春の暮て行らん
 かへて山もみちはすとも中くゝに青葉の春を思ひ忘れし
 一日く色を染まます紅葉ゝの是や限の山邊成らん
 常陸帯のかことかましき心哉かしまの神に祈る契は「一ノオ

▲霞梅 鴈 櫻	越前	山	ひとりきて独歸るの山なれば迷はん旅の道そかなしき	四〇一
▲霧雪 顔の池	加賀	池	昔見し顔の池にはみ草ゐて移しかへたる袖の上の月	四〇二
▲月 原 小野 若な	同	路	つかひても深き霜夜や侘ぬらむ狩ちの池の鶯の諸声	四〇三
▲若草 あやめ 鶉	能登	嶋	浪高きかしまの舟の梶枕夢さへ遠き古郷のそら	四〇四
▲熊鷹 雪 叢	越中	香	立歸り又見んこともかた貝の川浪清き瀧つ流れを <small>ニホオ</small>	四〇五
▲清き瀬 霧	丹波	片貝河	からみ山からくも雪を分きつる方もしられす又や降しく	四〇六
▲落瀧つ <small>ニホオ</small>	丹波	辛見山	御代を守る神なひ山の神葉にゆふしてかけて猶や祈らん	四〇七
▲雪ぞ千年の	同	神南備山	長からん御代のためしも知れけり神田の里の八つかほの稲	四〇八
▲神万代 注連	同	神田里	岩波のさはく心の隙もなし浮世を渡る船のかち嶋	四〇九
▲時雨 村雲の里	丹後	梶 嶋	手枕の夢もかれ野の浦風に幾夜浮ねの月に明しつ	四一〇
▲千早振 稲	同	神御子石	旅人の往来をさきく守らなん道のほとりの神の御子石	四一一
▲月 日	因幡	枯木浦	からの崎のいくりに生るみるめたに刈ともなしにぬるゝ袖哉	四一二
▲曠の夢 汐風	石見	神御子石	咲花は散も残らて行春の形見の山にかゝるしら雲	四一三
▲田鶴 磯こす波	同	形見山	かも山の岩ねの下に朽る身や名は埋れす世にぞ残れる	四一四
▲嶋浪の花	同	鳴 山	しほるゝはいつれからかの嶋にすむ海士の袂と世に渡る袖	四一五
▲過行秋の	美作	辛荷嶋	わかす計ぬるむ涙はかつまたのみゆにも通ふ我思ひ哉	四一六
▲道しるへ	備前	勝間田御湯	からことの泊ときけは古郷の友をしそ思ふ波のしらへに <small>ニホウ</small>	四一七
▲いくりに深みる	備中	唐琴泊	冬も猶椎か梢のふか緑これや葉守の神なひのやま	四一八
▲あら磯	同	勝間浦	初子をや待つゝ雪もかつ消るかつまの浦に小松引らん	四一九
▲風木引 麻衣	同			
▲嵐ふく	同			
▲岩根	同			
▲妹か待つゝ	同			
▲五月雨 いなひ	同			
▲妻玉も 鵜 妹	同			
▲この山や	同			
▲道のかきり	同			
▲浦 五月雨 船	同			
▲月松風	同			
▲住吉の松風通ふ <small>ニホウ</small>	同			
▲千早振 椎柴	同			
▲梢の葉 雪	同			
▲宮 <small>ニホウ</small> 十代の子日	同			
▲姫小松 ちはやふる	同			

- ▲花衣紅葉の洞の月
- ▲川野渡里入江
- ▲霞春駒柳陰
- ▲あやめまこも霧水千鳥船
- ▲小塩山シヨウザン
- ▲村野杜官万代
- ▲神樂岡きね藤杖ゆゑたすき
- ▲川山漣宮鶯谷
- ▲櫻霞鶯蛙貼
- ▲袋霧月雪玉
- ▲松かえ御調物
- ▲衣春日月妹
- ▲いかるか富小川
- ▲ねぬなは月水
- ▲霜枯入塩
- ▲千鳥
- ▲月秋の暮
- ▲松風
- ▲炭いかにやけ
- ▲はか白く成らん
- ▲春風柳陰
- ▲五月雨まのうら
- ▲風吹草枕
- ▲掃衣葦ね覚
- ▲鳴海海夕波
- ▲千鳥
- ▲東路てこの呼坂
- ▲ましら鳥も鳴三オ
- ▲里村植田
- ▲刈ほす稻
- ▲入江内海水
- ▲天羽衣月鳥
- ▲あちのむら鳥
- ▲洞嶺鷺山
- ▲花杉月水魚
- ▲幾千代の秋
- ▲菊の花

- 同 加佐く幾山
- 山城 淀
- 同 吉田
- 大和 吉野
- 同 宜寸河
- 河内カワチ 周可池
- 和泉 横野堤
- 同 吉見里
- 同 横山
- 摂津 淀継橋
- 尾張 夜寒里
- 同 喚續濱
- 駿河 呼坂
- 近江 吉田
- 同 余古浦
- 同 横河
- 同 吉水里

立わたる夕の雲の一筋は橋かともゆるかさゝきの山
 与
 汀河水初水より氷そめつゝ淀川のとむと人く今朝は見るらん」三ッ
 よしたにてある人のもとへいひつかはしける
 花さかり吉田の里にきる杖のつくとはなしに尋てそ知
名所鑑 吉野山よしと知てや鶯も幾年春に馴て鳴らん
 あやにくに照そふ月のよしき河よしや流るゝ影と思へは
 さゝ波のよるかの池のいひしらぬ月の光やこよひ添らん
 暮るより草のうれはに霜降て横野の堤月そ寒行
 琴の音にかよひたにせよ昔思ふ月も吉見の里の松風
 明かたの雲かとそ見る横山の炭やく煙風になひきて
 渡初し中もしはしはよとむ共淀の継橋つきて通はん
 都にも思ひ出らむ旅枕夜寒の里に衣うつなり
哀傷
 名にしおはゝいさよひつきの濱ちとりなき人よひて我にえさせよ
 たつきなく迷ふ山路に降つもる雪にましらも友を呼坂」三オ
 作る田のよし田の里に住なるゝ民やすけなる御世の恵に
 風吹はこたかみ山に雲晴て月さえわたるよこの海つら
 すめはずむよ川の水の月影や八重立雲のかゝる山にも
 吉水の里をはかれす咲花や幾万代の秋のしら菊

▲旅船入月
▲高嶋山
▲石邊河原
▲緑の林
▲鶯菜根
▲花
▲童春駒
▲萩
▲浦わこく船
▲葛きりくす
▲月日
▲八雲立出雲の
▲こら霧山際
▲藤原都 株
▲今爰に移す
▲言の葉川原
▲原里川原
▲水鶏 早苗 撫衣
▲養鶴 淀車
▲寺清 瀧川
▲雉 蟬 やすらひ花
▲玉椿
▲杜宮 神 川 子規
▲御賦 雪 日くらし
▲呼子鳥
▲山川 原 杜 霧 春
▲山櫻 蘭 卯花
▲紅葉 月 鴈 時雨 龜
▲山野 尾 上 宮
▲櫻 春 雨 雉 子 萩
▲撫子 薄 袖 鹿 雪
▲山嶺 杜 宮 河 原
▲神里 花 鶯 螢
▲五月 雨 鴈 葛 城
▲一日には千度参
▲りしひんかしの
▲昔月
▲敷嶋
▲あやめ草
▲春 雨 月 秋 風
▲水もとけぬ
▲櫻 左 保 姫 霞
▲子規 紅葉 神 な 月
▲ぬさ 時 雨 霜

同 夜中瀉
同 横田山
上野 横野
丹後 吉野
出雲 能野
山城 新玉津嶋
同 竹田
同 高雄山
同 高圓
大和 立田
同 高間
同 橋嶋宮
同 瀧御門
同 高市宮
同 玉井沼
同 玉水瀧宮
同 手向山

更過るよなかの瀉を行舟のほのかに出る有明の月
よこ田山陰も木茂き深緑かゝれとて社はやし初けめ
霞たつよこ野の莖咲つともしらてや人のよきて行らん
花もなき吉野の宮の春風や人もいとほぬ松に吹らん
古郷を思ひいつものよしの山雲たにかゝれ花と見るへく

太

蜘蛛のいともかしこし九重に光を分る玉津嶋姫
冬かへぬ竹田の原の陰ふかみ所からなる鶴の諸聲三ッ
雲はらふ風の音の高雄山浮世の夢も寒きよの月
偽をたゝすの宮に涼しさを秋とあさふく杜の下風
無名のみ立田の川の紅葉も渡らて中は絶る物かは
高圓の野への尾花の袖つきて萩の錦や立まするらん
雲とのみ見てやゝみなん匂はずは高間の山の花の春風
聞はたゝ昔戀しき橋の嶋の宮人みぬ世なれとも
行水はよるひるとなし東の瀧の御門とも名のみ流て
月ならて誰かしらまし傳へ聞たかちの宮の昔かたりを
あやめ草五月のけふはつらぬくと玉井の沼に誰まとふらん
玉水の瀧つの宮の秋の月むかしや残す光なるらむ
神もうけよおなし手向の山櫻秋の錦に立もかはらし

四六二
四六三
四六四
四六五
四六六
四六七
四六八
四六九
四七〇
四七一
四七二
四七三
四七四

▲立田山 五月雨三才
 ▲戀わひて 杜若
 ▲野 春雨 櫻 鷹
 ▲霜雪 鶴草
 ▲萬蒲
 ▲朝霧 紅葉
 ▲山霧 細川の頼
 ▲梅花 女郎花
 ▲狩 白露 霜 枯
 ▲吉野川 高殿
 ▲船出 春風
 ▲山卷 向 櫻 月
 ▲露 岩 根 雪
 ▲尾上 松 長 屋
 ▲郭公 童 女
 ▲袖の香
 ▲離駒 榴
 ▲あせみ 花 さく
 ▲里 時鳥 掃衣 月
 ▲雪 白波 けこ のそ
 ▲なへ 伊駒山
 ▲秋初 風 月 霰
 ▲木 枯 草 の 露 三ッ
 ▲宮 石 舟 露 梅
 ▲時鳥 螢 氷 室 虫
 ▲難波 旅 衣 霜 雪
 ▲鶴 芦 海 土 雨 による
 ▲里 岸 卯 花 歎 冬
 ▲時鳥 月 垣 根
 ▲沼 三 嶋 江 春 駒
 ▲あやめ 五 月 雨 芦
 ▲夏 の 月 氷 霜 枯
 ▲万代 君 か 守 り
 ▲を して る や
 ▲難波 の 海

同 竹原石井
 同 絶間池
 同 高松山
 同 多能武池
 同 竹原山
 同 多武山
 同 太麻久良野
 同 多藝津河内
 同 珠城宮
 河内 橘 寺
 同 玉田横野
 同 高 安
 和泉 玉横野
 摂津 高 津
 同 田 蓑 嶋
 同 玉 河
 同 玉 江
 同 大 刀 造 江
 同 直 越

夕立の露も涼しき竹原の石井の水に月を移れる三才
 吹風の寒き朝けの水の音も絶間の池や氷とつらん
 高松の山風寒み春きてもいつとかまたん花の梢を
 来ん年をたのむの池のあやめ草刈ても長き根や残すらん
 葉かへせぬたか原山は名のみかも紅葉は外の色に増りて
 見る人の心をすまず嶺の月立なかくしそたむの山霧
 手枕の野への朝露深き夜の月に別したか名残そも
 御幸せしむかしに帰る波はなし瀧つ河内の絶ぬ流れも
 咲花に思ひこそやれ玉きはる珠城の宮のいにしへの春
 昔にもかはらて香にや匂らむ名に橘の寺は見えねと
野寒原
 霰ふる玉田横野の駒たにもすさめぬ迄にかるゝ叢
 伊駒山時雨降らし秋風の吹来る音も高やすの里
 唐にありてふ山かみながらに玉のよこ野の草村の露三ッ
 跡もなく荒し高津の宮にしも春や昔にかへるむめか香
 鳴渡る田鶴の行ゑも白雪のつもるたみのゝ嶋かくれして
川雪
 卯花のさかぬ垣ねもなかりけり雪降つもる玉川の里
 求えぬ玉江の沼にまどふともさもあしからぬ言の葉もかな
 武士のたちつくり江の名もしるし治まる御世を猶守るとて
 急かるゝ都は月をしるへにて夜たゝ越ぬる道のくまわを

四七五
 四七六
 四七七
 四七八
 四七九
 四八〇
 四八一
 四八二
 四八三
 四八四
 四八五
 四八六
 四八七
 四八八
 四八九
 四九〇
 四九一
 四九二

- ▲白石の玉出の水
- ▲小夜更時鳥
- ▲伊勢の海
- ▲鈴鹿山鹿
- ▲霧
- ▲宮花のしつえ
- ▲岩枕神寶
- ▲花のにしき
- ▲緑なる色
- ▲幾代かへぬる三才
- ▲霞藤早苗
- ▲富士登舟雪
- ▲足柄山嵐
- ▲花の雪ふむ
- ▲君にあはん
- ▲貝千鳥の跡
- ▲原牧逢坂霞
- ▲霧萩鹿薄
- ▲旅人はし紅葉霜
- ▲下草
- ▲里初鷹
- ▲いなはの風
- ▲里垣根の露
- ▲さらす調布
- ▲沖つ白浪
- ▲袖やぬれなん
- ▲ふみまとはせる
- ▲玉章
- ▲あか駒時鳥
- ▲嶺玉椿雉子
- ▲御狩霜推柴
- ▲やよひの草萩
- ▲離駒月露三ツ
- ▲鶉鳴野路鹿
- ▲秋月秋風

- 同 玉出水
- 伊賀 誰其杜
- 伊勢 高濱
- 同 多津我美坂
- 同 滝原
- 参河 竹屋
- 駿河 田子浦
- 相模 竹下
- 同 立野山
- 同 袂浦
- 武蔵 立野
- 同 田能武沢
- 同 玉河
- 常陸 高間浦
- 同 田邊磯
- 同 玉横山
- 近江 鷹尾山
- 同 玉野原
- 同 玉川

曇なき玉出の水を法のためくまは心の底もにこらし
 今ぞ聞ねぬ夜をかさね待人は誰その杜になく郭公
 伊勢の海士釣する船の漕婦り幾そ度とも波の高濱
 吹風の音そかはれるすゝか山けふより秋やたつかみの坂
 山姫のさらせる布や瀧の原の神のまに／＼手向請らん
 うきふしはいつくもおなし世中に枕定めん竹の屋の里三才
雪混波
 降晴て猶影うつす富士のねの雪にましはるたこの浦波
 日もはやく竹の下道行なやむ足柄山をいかて越まし
 契来し人の心の秋風やたち野の山の色にみゆらん
 いやましにみちくる塩のひるよなき袂の浦や我身成らん
 秋もはや立野のまゆみ紅葉して色こきよりもちらんとやする
 今はとて別るゝ鷹は又もこん秋をたのむの沢や立らん
 心をやいかてみかゝん玉川のさらす手作りさらてきる共
 風の音も高間の浦の波枕夕暮は猶旅そのうき
 衣手のひたちの海を漕舟のたなへの磯や急き過らん
 折にあひて鳴こそ渡れ杜鵑聲も五月の玉のよこ山
 起出る袖の寒さもましらふのたかのお山の雪の朝に
 夏の日ば草葉にかゝる露もなし何を玉野の原といふ覽三ツ
 みをはやみ流るゝ月を萩かえの露にとゝむる野路の玉河

△長閑き御代の影そうつれる
 △山川あとの湊 櫻柳 五月雨
 △月船筏 袖萩 △久しかるへき 御代
 △川 卯花 夏はらへ 氷魚 袖山 網代
 △納涼時雨 水やな △菊 露霜
 △初霜 村菊 △みすもせく
 △おさめん御世は 神のまに
 △七夕引糸 菊 白妙の雪
 △ひとつして万代 たらす月
 △若ゆてふ水 老人 たと川 言オ

同 高槻河
 同 高嶋
 同 玉松山
 同 田上山
 同 立入村
 同 玉村
 同 玉津小川
 同 高倉山
 同 高宮里
 同 玉作河
 同 多藝野
 同 田跡河
 信濃 頼里
 上野 多胡入野
 陸奥 玉造江
 同 武隈
 同 多波志根山
 同 玉川
 越前 玉江

動なき君か御代とや岩波の高つき川の清き瀬の聲
 高嶋の三保の袖人をつからよきてや花の一木咲らん
 白波のこすとも見えてつもらなん玉松山にふれる初雪
月照網代
 ひをならて田上川を流くる月もやかゝるうちの網代木
 かさす人もなくてたてりの村菊は花の齢もさそな久しき
 秋に咲花になそしも劣るへき初霜結ふ玉のむら草
 底清き玉津小川の水の面に光あらはす秋のよの月
 君か為八百萬代と祈らまし神のいまする高みくら山
 高宮の里に引てふいとなみに長き夜をすらすくいもねす
 波かくる汀の草の深緑朝夕露の玉つくり川
 老らくの身も若ゆてふたきの野の瀧つ流を行てくまはや言オ
 瀧つ瀬の名に流たるたと川やたとるくも渡りてをみん
 なをさりの契なりせは信濃なるたのめの里の名をも頼まし
 夕されはたこの入野の葛の葉のうらさひしけに秋風そ吹
 名のみしてくる夜も見えず無人の玉造江やいつこならまし
松久友
 よそなから我も齡は武隈の松は久しき友としらすや
 をそならて思ひたはるゝたはしねの山の櫻の色にそむ身は
 物思へはふかぬ塩風身にしみぬいかに流るゝ袖の玉川
寒声
 冬も猶むれ入鳥の為とてや玉江の芦を刈残すらん

五三
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 五〇
 五一
 五二
 五三
 五三
 五四
 五五
 五六
 五七
 五八
 五九
 五〇

芦 鷹 鳴 花 かつみ

夏 劫

竹 泊

△すゝめ貝雪

同 武生國府

△道口

同 竹 浦

△真砂 厲金

加賀 高淵山

△狩人 雉子_ニ語_ヲ

能登 高淵山

▲藤波 舟 梶

越中 垂 姫 崎

しら 浪 崎

同 立 山

▲にひ川 雪

同 多古浦

▲鳴 藤 郭 公

出雲 多 久 嶋

五月 雨 松

石見 高 田 山

早 苗 海 士 人

同 高 間 山

▲海 士 藻 塩

播磨 高 砂

乙 女 を る 機

依 月 客 來 住 江 の ま つ に は と は て 高 砂 の 尾 上 の 月 に 人 は き に け り

▲時 鳥 五 月 雨

秋 風 の 音 も 高 間 の 山 み れ は 一 日 く に 木 間 そ ひ 行

せ か ひ の 水 に

ま こ と 有 る 道 を 思 は 哀 み を た る み の 神 の 守 ら さ ら め や

種 ま き し

ぬ き を 薄 み 霞 の 衣 は り ま な る た て の 崎 に も 年 や 越 ら ん

▲木 間 妹

櫻 花 ち る と も 見 え ぬ 盛 に は 嵐 や た ゆ む た ゆ ら き の 山

▲岸 尾 上 浦

君 か 代 に 猶 つ み そ へ ん と み 草 の 高 倉 山 も 所 せ き 迄

櫻 霞 月 紅 葉

た け 嶋 の 陰 は よ く に も か は ら め や あ と 川 波 は ま な く よ す 共

▲あ げ の 玉 垣

年 月 を ふ れ と か ひ な き わ か の 浦 に 光 を か も な 玉 つ し ま 姫

▲た ち ぶ ね

お ほ ろ け の あ ま は し ら し な 塩 た る 衣 の 玉 の う ら に 有 り と も

▲尾 上 の 櫻

道 遠 し 塩 風 寒 み 乗 駒 の 手 綱 の 濱 に 行 な つ む ら ん

▲と み 草 の 花

同 手 綱 濱

▲門 田 刈 稻

同 同

▲鷺 卯 花

同 同

▲千 鳥 月 海 人_ニ言_オ

同 同

▲山 江 和 哥 浦 鶉

同 同

▲月 千 鳥 小 松 原

同 同

▲離 小 嶋 白 玉

同 同

▲千 鳥 鶴 月

同 同

▲鹽 塩 風

同 同

▲遠 妻

同 同

五三

- | | | | |
|---------------------------|----|------|--|
| △花柳松 | 同 | 高野山 | 山寺灯 |
| △月苔の洞 | 同 | 玉川 | 高野山常の燈長き代に絶ぬや法のひかり成らん |
| △關伽松の戸 | 筑前 | 垂間野橋 | くむ人をいさめて残す言の葉の恵みそ深き玉河の水 |
| △高野の奥 | 肥前 | 玉嶋 | 朝日さす霜の雫やたるま野の橋の下行舟そ侘しき |
| △たひ人 | 肥後 | 多波礼嶋 | 我戀戀人の栖を玉嶋のあたりとたにもきかは尋ねん |
| △と渡る船の | 日向 | 橘小戸 | たはれ嶋に立てふ波のぬれ衣を思はず袖にかけてみる哉 |
| △川松浦花 | 同 | 高千穂嶽 | 住吉やむかしを聞は西の海名もなつかしき橘のせと |
| △春月柳船 | 同 | 竹敷浦 | 天降る神の昔の跡とへはいともかしこき高ちほの嶺 |
| △五月雨舟雪 | 未勸 | 高瀬山 | 紅葉のちれば錦をたか敷の玉もにそへてかつく浦人 |
| △波のぬれ衣 | 山城 | 蓮臺野 | たかせ山夕月待て越なまし風も涼しき松のした道」 <small>三ツウ</small> |
| △螢あたま | 大和 | 袖河原 | あなうらをむすはん為に此世より蓮臺野をや踏ならさまし |
| △天の戸ひらき | 伊勢 | 袖振山 | 曾 |
| △清むる我身 | 陸奥 | 袖師浦 | 枚 <small>(こ)</small> ならぬ身を知雨に水まさる袖の河原と人や見るらん |
| △紅葉玉藻 | 信濃 | 曾乃原 | 初冬時雨 |
| △御船上方山 | 陸奥 | 素親濱 | 冬といへはまなく時雨の乙女子か袖ふる山や雲の通路 |
| △嶺松紅葉 | 出羽 | 浦 | いせの海に絶す釣する蟹なれやぬるゝ袖しの恨ある身は |
| △入海麓の草 <small>三ツウ</small> | 因幡 | 山 | その原の野へのかる萱風またてそゝろに露の玉そ乱るゝ |
| | | | 日本の内にはあらしそとの濱はてしもあらぬ道の遙けさ |
| | | | みるめなき我身は浪に朽にきと人には告よ袖の浦風 |
| | | | いかにせん俤にのみそひ山のかひなき中に結ふ契を |

- △真菅 千鳥
- 御祓 田鶴 汀
- 五月雨
- △佐保 姫 霞 螢
- 千鳥 鶴 かつを
- 波 芦 邊 三ッ
- △岸 螢 紅葉
- 漁火 藍 染 川
- とも
- △原 宮 里 霞
- 梅 郭 公
- 宇治の 渡
- △桂 の 宿
- 藤 花
- △む かし わ か 折
- △八十のちまた
- 紫ははいさす
- △は ち す は
- △大船 住江 網引
- 濱ひさき 海士
- 月松 五月雨 雪
- △猪 名 野 漁 火
- 海士乙女
- △霞 青 た つ
- 螢 霧 水
- △山 口 を 頼 む
- △神 社 卯 花
- 三の御名 三ッ
- △は や し 崎
- △すゝか ね
- 駅 妹
- △伊 勢 入 舟 人
- いかり 風 た つ
- △鷺 時 鳥 松
- 万代の聲
- △郡 岡 武 藏 野
- 葛 雪 夕 暮

- 出雲
- 素我河原
- 同
- 袖師浦
- 筑前
- 染川
- 山城
- 綴喜
- 同
- 月輪
- 同
- 月林
- 大和
- 海石榴市
- 同
- 劍池
- 摂津
- 津守浦
- 同
- 角松原
- 同
- 津國羅江
- 伊賀
- 伊賀
- 月讀宮
- 伊勢
- 鼓嵩
- 同
- 都追美井
- 尾張
- 津嶋渡
- 相模
- 鶴岡
- 武蔵
- 都筑原

小遊のよすか成けり旅ねするそかの河原に生る真菅は
 寒き夜の袖しのうらに鳴千鳥なれもや霜を拂佐らん三ッ
 染川を渡らぬ袖も春くれは心の花のいろになるかな

津

さまくゝに色を分ちて咲花のつゝきの原の秋そことなる
 月の輪の寺にしいらはくらきよりくらき心も照さゝらめや
 晴る夜の星かとみれば影うつる月の林の秋の白露
 尋えぬ人の行ゑやつは市の八十のちまたに夕けとはまし
 見る人の心のつみや拂ふらむ劍の池の花のはちすは
 つみとかのつもり海士も漁火のくゆる心の有なましかは
 鳴鹿の角の松原吹風に幾里かけて聲聞ゆらむ
 氷るし水も難波のうら解て春へに帰るつふら江の波
 秋きぬとつけの山風音せすはそれともしらし残る暑さに
 世を守る恵もしるしめの前に影さやかなる月讀の杜三ッ
 苔ふかき鼓か嵩や鳴鳥もおとろかぬ代のためしなるらん
 いとせめて暑き日はたゝつゝみるの水馬やこそ嬉しかりけれ
 船人の急ぐつしまの渡りにはぬき取あへす乗て出らし
 諸共にかはらぬ千世の友とてや鶴の岡へに生る松かえ
 限なき草葉を分るむさし野につゝきの原や何つゝくらん

△神入江鹿嶋 鶴の数芦鶯	△根山霞櫻 子規	△山彦雪鶯	△江沼山紫芦 五月雨 あやめ うつみ草 真菅	△錨釣舟 人そまたるゝ △そのの濱 つかろ雪	△くまつら東路 赤裳のすそ <small>「モロ</small>	△嶋沢 △玉をしげると 見ゆる	△野邊えそ 萩妹	△山越岩陰道 鴈紅葉舟路 △迫門わかめ	△小螺 <small>「モロ</small> 石持て	△たのしき御代 △かゝり火	△螢五月雨舟 千鳥渡	△月弓はり みをつくし	△芦邊田鶴 みなと風	△大和路の きひの小嶋 <small>「モロ</small>	常陸 筑麻河	同 筑波	近江 託馬野	同 月出崎	美濃 月吉里	陸奥 壺碑	同 山榴岡	出羽 鶴嶋	同 露嶋	同 津輕嶋	越前 敦賀	能登 角嶋	同 机嶋	丹波 鼓山	隱岐 鼓嵩	播磨 津田細江	讃岐 弦打山	伊予 津尾崎	筑前 筑紫小嶋	忘れんと祈るにも猶戀心つくまの神のうけすや有らむ 今はとて思ひ立てもつくは山花に忘るゝ古郷のそら <small>霧中花</small>	つれなしと思ひし人は世心のつくまの祭見てそしらるゝ 日くるれと名を頼てや海士小船漕も帰らぬ月出の崎 いつくにか老をいとはぬ友もかなこよひは夜よし月吉の里 書つくすつほの石ふみえてしかな人の心の奥を残さて 時過るつゝしの岡のくすかつら問人もなき身をそ恨むる <small>「モロ</small> 鶴嶋の所からにもそたつ雛の古巢を出る羽ならはしに 秋の夜の明れは雲に入月の光を残す草の露しま 都出てつかるの嶋のしましくもえそ忘れぬ人の面影 うきも猶重なる雪に故郷を思ひつるかの越の旅路は つの嶋に生る若和布をかりの世のわさと知ても袖やぬれなん ひろけぬる文かと見えて鴈金のつくゑの嶋の上に連る 時鳥のうたぬ鼓の山茂みくるとあくとの空やまとはん 五月雨にくつれやすらむ川早み鼓の嵩のねさし淺くは いつまてか津田の細江のつたなくも身をつくしつゝ世に仕ふへき 君か代を猶守てふますらおか手に持弓のつる打の山 吹風の行方みゆるつおの崎湊になひく声の村立 いつよりか爰にこしまの嶋守と成果ねとや心つくしに <small>「モロ</small>	五八五	五八六	五八七	五八八	五八九	五九〇	五九一	五九二	五九三	五九四	五九五	五九六	五九七	五九八	五九九	六〇〇	六〇一	六〇二	六〇三	六〇三
-----------------	----------	-------	------------------------------	---------------------------------	-------------------------------------	-----------------------	-------------	---------------------------	----------------------------	------------------	---------------	----------------	---------------	-----------------------------------	-----------	---------	-----------	----------	-----------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	----------	---------	----------	----------	------------	-----------	-----------	------------	---	--	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

▲山川にふかるゝ笛
浪うつ岩
ぬき舟人棍
ゆきの鳴松
▲鈴音鳥狩
我戀は
心をくみて

肥後 鞍瀧
對馬 對馬渡
未勸 都武賀野
同 津々井濱

▲時鳥鹿賤の男
椎柴夕霧
白鳥なげき
▲鶯梅東路
初秋搦衣
くくる人もなき
▲海人
うみ松
▲目覚し草

山城 寢山
美濃 祢覚里
丹波 根蓴浦
同 子日崎
未勸 眠森

▲燈籠つゝし
刈萱蟬蛸
松法の花月三六
▲里薄田つら
鳴落穂
▲川水のくさひ
岩間 西川瀬月
▲さし柳月駕
堤春風
▲霞櫻芹卯花
七夕 葵菊月
▲衣手春雨
山 八塩染たる
紅葉 山彦
▲山都里青丹よし
八重櫻 梅萩 鷹
時鳥 萱玉柳

山城 雙岡
同 長岡
同 鳴瀧
同 并池
同 中川
同 名木河
同 長谷川
大和 奈良

打ならず人もなき世は諫ならぬ鞍の瀧の音のみそする
船出するつしまの渡わたりてはこま唐土もよそにやは思ふ
去年よりも降つむか野の雪分て猶袖はらふ春の狩人
思ひ初し人に逢やとつゝゝあつの筒井の濱の水やむすはん

祢

枕かるね山かすその明方になれも名残やをしか鳴らん
衣うつ音さへかれて手枕のねさめの里の有明の空
ねぬなはのねぬてふ浦の名そつらき我待人はくるといふとも
打はへてけふも引らし松ならて子日の崎のあまの釣なは
吹とても覚る世もなし是や此長き眠の森の秋風

奈

明ほのにそれかとみゆる松杉のならひの岡にふれる薄雪三六
長岡や秋の田つらのほに出てことをかかせし昔をそ思ふ
都出て心しつかになる瀧の西の川波たち帰らめや
人なみにならひの池の生る世に身をうかへつといつかいはれん
終になとよるせなからむ絶ぬ共かたみに忍ふ中川の水
花咲ん春雨なれば衣手のぬるともほさしなきの河へに
秋の夜の長谷山に照月の桂やねたき嶺の紅葉ゝ
住捨しならの都の古郷につれてやつれぬ月の影哉

- ▲波弓張の月
- ▲發船
- ▲浦玉藻
- ▲有明の月千鳥
- ▲旅ね置露
- ▲八重櫻 口はしる
- ▲三世八乙女 日吉
- ▲山濱志賀浦
- ▲花月鹿さゝ波
- ▲紅葉田鶴 万代
- ▲麻菅稚柴
- ▲二葉の松
- ▲さゝ波雨
- ▲五月雨
- ▲戀の病の葉
- ▲いちし 御湯
- ▲里川郡 紅葉
- ▲花時鳥 紅葉
- ▲埋木月
- ▲山霞 呼子鳥
- ▲東路 郷公
- ▲鶴みやこ 人三ッ
- ▲人をあやなく
- ▲戀わたる
- ▲すゝの海
- ▲みるめ月
- ▲浦入江海釣
- ▲初草あま鶴
- ▲貝小首塩やく
- ▲まつたえ
- ▲うなひ川
- ▲月掃衣
- ▲なかひこの稲
- ▲山花のゆふして
- ▲千早振 諸人
- ▲室の浦
- ▲迫門の崎
- ▲彦星 長月
- ▲菊の下水
- ▲大嶋 蟹乙女
- ▲うへとの濱

- ▲奈留加海 上総
- ▲奈佐可海 常陸
- ▲撫子山 同
- ▲七社 近江
- ▲長等 同
- ▲長峯山 同
- ▲連庫山 信濃
- ▲七久理湯 陸奥
- ▲名取川 同
- ▲奈古曾關 出羽
- ▲奈曾白橋 能登
- ▲長濱浦 越中
- ▲奈古 同
- ▲長濱 丹波
- ▲長等村 同
- ▲長尾宮 播磨
- ▲鳴嶋 備中
- ▲長等河 周防
- ▲鳴門

わか中はよそになるかのうみ渡る船ならぬ身の何こかるらん
 袖とふやね覺の露の情あるなさかの浦の有明の月
 花にあらぬ老の心や入のこる夕日にめつるなてしこの山
 祈らすと七の神垣隔つなよ頼む仏もよそならはこそ
 行て見る春こそなけれ幾年か思ひなからの山の櫻を
 君か為御代をそ祈るゆふたすきかけの垂尾の長嶺の山
 一かたに猶かさなりて行雲のなみくら山の夕立の空
 わき出る涙あやなし七くりの湯にもあらはや人も問こん
 くまもなき今夜の月の名取川あらはれみゆるせゝの埋木
 天の戸の明ぬを春の隔にて名こそその関やこよひ成らん」
歳暮
 冬の夜の更行空に満汐の置こそわたせなそのしら橋
 すゝの海や霞渡れる長濱のうらめつらしき春の夜の月
 釣たれぬ隙さへ寒き塩風になこの海士人磯な摘らし
 暮ぬれはいつち行らむまつたえの長濱過るあちのむら鳥
 打音もまとをにあれや麻衣月見なからの村の里人
 ます鏡かけて頼まは山鳥のなかおの宮の神や守らん
 なき嶋の磯こそ波の数よりも我物思ひのしけき旅哉
 くめや菊の花こそちらめ齡のふなからの川の水は絶せし
 初塩になるとのなたを漕舟の梶の音もやあらたまるらむ

六四〇
六三一
六四三
六四三
六四四
六四四
六四六
六四七
六四八
六四九
六五〇
六五一
六五二
六五三
六五三
六五四
六五四
六五五
六五五
六五七
六五八

▲乙女らか楠
 うみをなす
 ▲濱子日衛松
 みるめ月雪
 貝鑑
 ▲杜我大君ニノオ
 ▲山瀧濱高根
 花月み熊野
 松風しめ
 立のほる月
 ▲名をたつ人
 △浦鰻船水鶴
 土佐海千鳥
 汐風貝濱庇
 △櫻六月御破
 呼子鳥
 △我戀の
 千重の一重
 △浦鴈金
 松の根
 △岩ふみならし
 △三嶋江に
 袖ひちて
 △卯月の袖
 御幣
 △標野並木の梅
 葵莖秋
 一本菊初霜ニツ
 ▲鶯妹か袂
 ▲春草鷹の使
 ▲八嶋山時鳥
 早苗月鹿
 蓬松下陰
 ▲河原淀花
 吉野川蛙柳
 ふしつくる鶯

長門
 長門浦
 紀伊
 名草山
 同
 哭沢
 同
 那智
 同
 七越嶺
 同
 鳴耶濱
 阿波
 鳴門
 土佐
 名越山
 筑前
 名児山
 同
 浪懸岸
 対馬
 名欲山
 未勘
 七瀬
 山城
 梅宮
 同
 紫野
 同
 梅原
 同
 馬咋山
 同
 向日山
 大和
 六田

けふとてやあまの乙女も玉の緒の長門の浦に濱なつむらん
 永日
 世の人の心なくきの濱千鳥跡付そむる春はきにけり
 身をすれば神に恨もなき沢に祈る契のかはり果てもニノオ
 みかさねに流るゝ瀧の音に聞なちのお山を見るよしもかな
 秋の夜の更ても遅き月影の今こそ出れ七こしの嶺
 明暮にねをそなくかの濱千鳥友やまとはす妻や戀しき
 心ほそくなるとの浦を漕舟に都忘るゝ沖のあら浪
 あつき日をいかにせましと堪侘る心なこしの山のはの月
 旅衣うらふるゝ身はあつふすまなこ山陰の名をや頼まん
 我袖はあやしきまでに波かけのきしもせさらん人故にこそ
 何かせん世に埋れる名ほり山岩根か下に朽る身の後
 みしま江や声の枯葉は朽はてゝ七瀬のよとに寒る月影
 無

六五九
 六六〇
 六六一
 六六二
 六六三
 六六四
 六六五
 六六六
 六六七
 六六八
 六六九
 六七〇
 六七一
 六七二
 六七三
 六七四
 六七五
 六七六

▲鹿松月
秋風千鳥三ッ

同
虫明松

納涼
秋またて鳴かそ思ふ虫明の松に聲ある夕涼しも三ッ

六九

▲川山里橋渡
網代八十ち
霞霧水魚橋姫

山城
宇治

河上落葉
網代木に流てとまる紅葉も行ゑしられぬうち川なみ

六九

▲大荒木しめ縄
郭公埋木棹

同
浮田杜

心ひくかたのみしけく世中はいかに浮田の杜のしめ縄

六九

▲九重芝生
小車の輪立

同
内野

なへて世の木このめも春またて雪の内野に匂ふ梅かえ

六九

▲坂里野沢霞
霧雉女郎花

同
瓜生山

秋は色のことに成ぬるうりふ山かくしも誰か作り置けん

七〇

▲大原萩
すかる

同
上野

枕かる上野の原の鹿の音はねられぬからに友とこそなれ

七〇

▲山柴車
辰市

大和
牛尾

をのつからからぬ真柴や負ぬらん牛のお山の茂りたつ比

七〇

▲三笠山
氷をたたく

同
鶯瀧

名を友と鳴よるまゝに散波の花の雫や鶯のたき

七〇

▲こふる涙
夢路現

同
假寝橋

渡る世はたうたうねの橋なれやさそとはいひて驚もせず

七〇

▲夏の半の月
諸人のならず

同
打廻里

月清みたかいねかてに麻衣打わの里に音ぞ聞ゆる

七〇

▲花園くものる
やよひ三ッ

同
鶯山

鶯の山さへ春をしらざらん消ぬかうへにつもる白雪三ッ

七〇

▲大野御幸萩
鹿月雉雪鷹

同
宇陀野

庭上鶴
みかりするよをうたのよをよそにして雲の庭に遊ぶまな鶴

七〇

▲玉きはる
馬霜冬枯

同
内乃大野

吹風の便にそ見る秋霧の内の大野の花の草むら

七〇

▲かし原宮鶯
鷹紅葉雪

同
歌火山

たつ霧は烟と見えてこかれぬるうねひの山の嶺の紅葉

七〇

▲神なひ
紅葉

同
占手山

見し夢のうらての山の草枕あはする人に誰を頼まん

七〇

▲行春
紅葉

河内
鶯關

春に鳴聲も長閑し鶯の關の戸さぬ御代にたくへて

七〇

▲雨はれて萩

和泉
上野

野草
百草の咲て乱る花の中に何かうへ野萩のさかりは

七〇

七三

- ▲須磨月 柴の庵
- ▲霞霧千鳥
- ▲月雪松夜衣
- ▲神風はた薄
- ▲君か万代
- ▲松に吹池のうら風
- ▲これも又
- ▲都のたつみ
- ▲渡 田子浦
- ▲霞 千鳥網三ッ
- ▲富士 五月雨
- ▲雪月松柳
- ▲社 蒿春雨
- ▲霞 旅人
- ▲露 旅人
- ▲篠葉 露霜
- ▲山霞 田鶴
- ▲夏麻引 鷹
- ▲志賀の浦 花月
- ▲駒霧 鳩船
- ▲鹿 田鶴旅人
- ▲むら薄 月半
- ▲坂ひな曇り
- ▲妹か戀しく
- ▲神霞 松緑
- ▲月千鳥 龜
- ▲里 郭公
- ▲朧月 短夜
- ▲杜かゝり火
- ▲螢馬 渡る瀬
- ▲清き瀬
- ▲うかはたち
- ▲釣する海人
- ▲舟三才
- ▲よさの海

- 後山
- 浦初嶋
- 内外宮
- 浮嶋山
- 宇治山
- 有度濱
- 浮嶋原
- 宇津山
- 宇麻具多
- 海上瀉
- 打出濱
- 宇祢野
- 碓氷山
- 浮嶋
- 卯花山
- 鵜坂川
- 宇奈比河
- 内海
- 内外濱

名所花
すまの山のうしろめたくも思ふ哉若木の櫻風にまかせて
行てこそ猶まさりけれ兼てより思ふ心のうらの初嶋
君か代を神も嬉しと守るらし内外の宮る玉をみかきて
うき嶋の松吹風の音に猶秋来にけりとみゆる月影
こは人の為とや神も跡垂て世をうち山にしかそ住らん
うと濱のむかししらるゝ夕日影さすや乙女の袖もみゆらん
ふしのねのめつらしけなき雪に又はつかに降るうき嶋か原
秋かけて茂りな果そうつの山移る心のつたのほそ道
旅にあればうななみ山の椎のはにもるてふ飯にうゆるのみして
秋風や寒まさるらし麻衣打出の濱の月更る夜に
なれも又心のやみのよるくや世をうねの野に鶴の鳴らん
旅衣うすひの山の秋風の身に寒ければ妹をしそ思
頼めつゝまつは枯なて浮嶋のうきたる人のことのはをのみ
時ならず咲かたとそ見る白妙の卯花山の秋の月影
うさか川かゝりの影を飛螢をのか友とや猶すたくらん
篝火の影にもしるしうなひ河夜河たつらし清き瀬ことに
いかにせん人の心の内の海に荒き波風たゝぬ間もなし
橋立やふみ見る人の世に絶し内外の濱の松をためしに

- 七四
- 七五
- 七六
- 七七
- 七八
- 七九
- 七〇
- 七一
- 七二
- 七三
- 七四
- 七五
- 七六
- 七七
- 七八
- 七九
- 七〇
- 七一
- 七二
- 七三

- ▲蛙あやめ菱
鳩袖ぬるゝ
▲紀の海塩風
湊雪
- ▲魚
- ▲あまさかるひな
播衣
- ▲かりにとほ
思はぬ旅
- ▲くろくも見えす
水はぬるめり
- ▲諸人をはくゝむ
ちかひ朝日
- ▲秋の夜の月
- ▲社
我立袖の聖
- ▲さつま渦
ゑのゝ郡
- ▲はた薄言
- ▲秋の月
- ▲下のごゝろ
- ▲渡山田川里中道
玉水蛙 歎冬
駒春風夏虫
- ▲春雪船はり
鹿衣うつ
- ▲海渡湊川
有馬山霧猿
しなかとり 篠原
- ▲五月雨舟襪
沖
- 石見
浮沼池
- 紀伊
浦初嶋
- 伊予
宇和郡
- 土佐
打山
- 筑前
鞆濱
- 同
漆河
- 同
産宮
- 肥後
宇土小嶋
- 豊前
宇佐宮
- 播磨
空穂嶋
- 未勘
浦野能山
- 同
宇留間嶋
- 同
宇波瀬川
- 山城
井手
- 大和
猪養岡
- 摂津
猪名野
- 武藏
猪名川

時過て引人そなきあやめ草うきぬの池の浮身のみかは
 朝もよひきの関守る春霞何へたつらん浦の初嶋
 いとはしき浮世成けりいさなとるうわの郡も思ひやられて
 誰里も今は衣をうつ山に宿かる夜半の寒き秋風
 秋は来ぬ旅の衣の短きにうつら濱とやねのみ鳴らん
 戀渡る人をいつしかうるし川見馴ぬからに袖はぬるめり
 たらちねの恵そ深きうみの宮神のちかひも思ひ知るゝ
 なくたまぬうとの小嶋の秋の空都もおなし月を見るにも
 人名
 人はたゝ身のうさのみや歎らん悲しき後の世をは思はて
 名にしおはゝ熊や住らむうつほ嶋年を古木の陰高くして
 夏衣うら野の山のはた薄はた涼しくもなれる秋風言
 戀渡る人としあらは遠つ国うるまの嶋も住うからめや
 行水の音しなからもうはせ川うは氷する風の寒けさ

井

水初結
 下の帯の契はいさや薄氷結び初つる井手の玉みつ
 風の前に塵やるかひの岡のへに降かとみれば消る泡雪
 かるもかくるな野もいこそやすからね小篠か原の風さやく夜に
 しらしかし上は氷れるるな川の深き心の瀧つなかれを

七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九

- ▲原 柳 柴の垣
- ▲子日の小松
- ▲菊時雨雪
- ▲玉の臺鹿月
- ▲西の光まき柱
- ▲秋の花薄
- ▲嵐山入井川
- ▲三笠山
- ▲藤なみ言ヲ
- ▲高瀬妹
- ▲近江路旅人
- ▲月篠原鶴
- ▲浮橋時雨雪
- ▲瀧つ瀬
- ▲崎道夏草
- ▲萩薄月狩
- ▲村雨駒鴉
- ▲里霞鶯
- ▲東路初草雪
- ▲入江一橋玉川
- ▲菅こも松若な
- ▲月千鳥雪
- ▲櫻藤時鳥稚
- ▲月旅枕柴
- ▲海士いきり火
- ▲春の日月待
- ▲宿野の水
- ▲女郎花月
- ▲草茂る冬枯
- ▲岩代戀
- ▲泊沖つ白波
- ▲塩風浦舟言
- ▲里昔北舟
- ▲搦衣うつせ貝
- ▲千鳥松雪
- ▲松虫淺茅
- ▲時鳥駒下草

- 山城
- 野 宮
- 法成寺
- 法 輪
- 能登河
- 能登瀨川
- 野 路
- 能登瀨河
- 野 嶋
- 野 上
- 野 田
- 後瀨山
- 能登海
- 能義郡
- 野中清水
- 野中清水
- 能解浦
- 野 坂
- 野中杜

野

菊の花見てやは過ん野宮の神のいかきも越ておらまし
 此國にひろまりかたき古の法も成てふ寺そかしこき
 いかにせん三の車と説法のわをかけなからよはき力は
 のと川に沈むと見えし月影は三笠の山をのほる成けり言ヲ
 水解て打よる波も高瀬さすのとせの川の長閑なるこ
 朝露を分行野路の篠原やしのにぬるゝ旅の衣手
 のとせ川清き流にすむ月も影やすからぬ風のさゝ波
 露ふかき野嶋か崎に旅ねして海士と見る迄袖そしほるゝ
 起出る野上の里の枕には露の外なる露そこほるゝ
 今しはとさそ夕塩やみちのくの野田の松風音替る也
釈教
 哀身の後せの山の花や見ん我とはうへぬ草木なれ共
海邊霞
 能登の海や釣にともせる漁火の影より霞む春の曙
物名
 春寒みまた咲やらぬ花の木の水て露やそれとみゆらん
野月
 昔より宿り馴てや草深き野中の水に月のすむらん
 岩代の松か枝ならて頼む哉野中の清水結ふ契を
 われ爰にえにしあればそ泊舟あらくな吹そのこの浦風言ヲ
 水嶋に通ふ野坂の浦千鳥なれも渡るかやすからぬ世を
 里遠き野中の杜の子規待人もなき音をや鳴らむ

- 七五〇
- 七五一
- 七五二
- 七五三
- 七五四
- 七五五
- 七五六
- 七五七
- 七五八
- 七五九
- 七六〇
- 七六一
- 七六二
- 七六三
- 七六四
- 七六五
- 七六六
- 七六七

▲櫻龜山御幸
 かりへのつかさ
 ゐせきかへり火
 ▲盤千鳥 舟舟
 ▲月檻 後鷺
 ▲蛙 五月雨
 ▲水草 菊
 ▲槿の花 松月
 ▲老せぬ宮 鳩杖
 ▲藤女郎花 御幸
 ▲山里市柴 煙
 ▲炭頭鹿 雪
 ▲小野爪木 栗
 ▲野小塩 松櫻
 ▲つほ 望月 鷹
 ▲野 杜里 皇
 ▲夏草 時鳥 月
 ▲大原 弱風 月
 ▲入相の鐘 納涼
 ▲杜 入江 月 蟹
 ▲紅葉 雲牙

山城 大内山
 大井川
 大沢
 男山
 大原
 大原
 大荒木
 龍清水
 巨椋
 忍坂山
 大河淀
 大橋
 奥津濱
 御前沖
 大江
 大和田濱
 於乃江橋
 大淀

於
 いみしきな大内山の山風の吹つたへつゝすめる家居は
 大井河にて夏の心を
 夏山の陰を移して大井川青葉にまじる浪の花かな
 水邊菊
 大沢のいける世は見ん菊の花汀の波よ根さへあらずな
 轉女成男
 女郎花かりの色かは枯果て月さやかなるおとこ山かな
 あらましの心をたにも慰めんしはし宿りせ大はらの里
 山花盛
 大原や誰にとはまし花盛神代の春もかくはあらしを
 寄森戀
 大あら木の杜ならなくに茂ても人もすさめぬ我戀草は
 炭かまの煙立夜は大原や月も龍の清水ならても
 紅葉浮水
 おほくらの入江にうかふ紅葉、やうちの山風吹はらふらん」雲牙
 月影を見てやおとろく弓張のおしさか山の棹鹿の聲
 みよし野の大川よとのよとゝもに水底清き心ともかな
 大橋をなまめき渡る河内女の手くりの糸のよりもあはゝや
 霜深く奥津の濱に鳴千鳥いつち行らん寒渡る夜に
 詠やる末なへたてそ春霞御まへの沖に通ふつり船
 袖寒き大江の浦の朝風に見れば伊駒の嶺の初雪
 月清み千船の泊る大わたの濱松風や涼しかるらん
 帰ても古郷はあらしおのゝ江の橋も今はた朽ぬと思へは
 打しきる波やつらしと大淀のうらみて帰るあまの釣舟

六八
 六九
 七〇
 七一
 七二
 七三
 七四
 七五
 七六
 七七
 七八
 七九
 八〇
 八一
 八二
 八三
 八四
 八五

▲しげち 君し通は、	越中	大野路	よそにたに聞も物うき大のちのしげちもをのか戀のしげきに	〇五
▲生野露 <small>夏草</small>	丹波	大江山	涼 <small>山夏月</small> しきは生野の末もしられけり大江の山の夏のよの月	〇六
▲増井水 <small>紅葉</small>	同	大芋河	つれもなき人の心のおくも川なこむ計に御被をやせん	〇七
▲螢 <small>月空蟬</small>	同	大山	橋立や春の大山見渡せはいつともわかぬ松の色かは	〇八
▲あらふる神 御被	丹後	飲宇河原	人里のほかけもみえすまこも草おうの河原に枕しかまし	〇九
▲春霞 <small>橋立</small>	出雲	大嶋	はりまかた大嶋つたひ行舟や波も風に漕なやむらん	一一〇
▲松原 <small>こし</small>	播磨	大嶋	大嶋のなた行舟に是も又のりの為とや水はこふらん	一一一
▲五月雨 <small>千鳥</small>	備前	大嶋	夢にやは都を遠み大嶋のしましきいをもるる夜なければ <small>三ッ</small>	一一二
▲まこも草	周防	大嶋	秋更でしくるゝ露の玉かつらおもかけ山や色かはるらむ	一一三
▲嵐 <small>高砂</small> 船	長門 <small>同</small>	面影山	大葉山更行空の雲つきて出るも霞む春の夜の月	一一四
▲神松 <small>荻舟</small>	紀伊	大葉山	おの山の上より落る水ならて流るゝ年や音なしの川	一一五
▲梶取 <small>あへぬ</small>	長門 <small>同</small>	雄山	月や猶光そふらん奥つ嶋なへて玉しく清き渚に	一一六
▲筑紫路 <small>鳴門</small>	長門 <small>同</small>	奥嶋	百船の数も見えけり大崎やをはまの月のすみ渡る夜に	一一七
▲夜船 <small>松風</small> 雲 <small>ウ</small>	筑前	大崎	ね覚にもそれとしられて雲に鳴聲もおほきの山時鳥	一一八
▲有明の月	筑前	大城山	霧こむる大野の山の秋の夜に風吹方そ月にしらるゝ	一一九
▲霞 <small>たな引</small> 舟	同	大野	誰とても大渡り川渡る瀬の此世の外にありとしらなん	一二〇
▲音無の籠	同	大渡川	あるはなき浮世に何か思川うたかたやすき身とは知すや	一二一
▲さひか野 <small>鮑玉</small>	同	思河	思ふ人なくて住うき大すみの浦にはありといかてしらせん	一二二
▲月 <small>蠶</small> 漁火 <small>船</small>	同	大隅浦	かりてほす大野かはらのこも枕旅や浮世のかきりならまし	一二三
▲神の小濱 <small>百舟</small>	同	大野河原		
▲葛月 <small>霧</small> 松	同			
▲子規 <small>時雨</small>	同			
▲山 <small>三笠</small> の杜	同			
▲霧月 <small>紅葉</small>	同			
▲時雨 <small>ぼうかし</small> は	同			
▲つくし <small>なる</small>	同			
▲螢 <small>千鳥</small> 薄水	大隅			
▲水鳥 <small>鷺</small> 埋木	大隅			
▲我 <small>為</small> に	大隅			
▲つら <small>き</small> 心	大隅			
▲まこも <small>白菅</small>	大隅			
▲千鳥 <small>月川</small> 風	大隅			

▲二葉の松ニハエノマツ

同 大田松

千年ふる心ちこそすれ難面を大田の松のまつとせし間はニハエ

八四

▲霞うすカスミ

山城 鞍馬山

さやけさもすまては人のよもしらし名こそくらまの嶺の月影

八五

▲五月間イツキノマヅ

同 暗部山

春秋をくらふの山の花盛紅葉の今に色はまさらし

八六

▲女郎花メウラハナ

同 久世

秋きぬとくせの野原のしの薄忍ひもあへすほに出にけり

八七

▲月松谷ツキマツノ

同 草河

九重の都をちかみ往来する駒に刈かふ草川の水

八八

▲社野原シヤノハラ

同 雲居寺

誰もしれ月はいつこと空をさして雲るる寺の法のをしへを

八九

▲御祇薄ミギハク

同 雲林

時雨行空のみならて木々の葉も風にしたかふ雲の林に

九〇

▲夕涼みユソヤミ

同 久邇都

荒果しくにの都も春秋は花や紅葉の色そときめく

九一

▲山櫻ヤマザクラ

大和 栗栖小野

日も暮ぬ月の光もさし杉のくるすの小野に枕からまし

九二

▲寺テ

同 久米路

かつらきや立渡りぬを霞さへ風にとたゆる久米の岩橋

九三

▲燈星トウホウ

同 口無山

紅葉せん下染ならし口無の山は時雨に色かはり行

九四

▲宮花ミヤハナ

同 樟葉宮

秋風に梢残らす散果るくすはの宮の月そさやけきツキ

九五

▲時鳥トキトリ

同 草苺里

露深き野を分なれて日くらしに帰る家路も草かりの里

九六

▲野邊ノヘ

同 草香山

降つみし雪間もそひて緑なる草かの山は春めきにけり

九七

▲櫻ウツギ

同 莖渡

芦の葉を刈はらひぬる跡よりやくきの渡と名にもいふ覧

九八

▲糸薄イトハク

同 百濟

色にめてし千種の花も露霜にくたらの野へはとふ人もなし

九九

▲神川カミガハ

同 久岐田關

出てぬる川口ならて我中にくきたの関を何にすへけん

一〇〇

▲月ツキ

同 栗間

今爰にめぐりくるまの我身には猶こそ頼め伊勢の神垣

一〇一

▲山ヤマ

同

▲まマ

同

▲秋アキ

同

▲入江イリエ

同

▲難波ナニハ

同

▲川野カハノ

同

▲鷺萩ササガ

同

▲河カハ

同

▲いなイナ

同

▲旅ツリ

同

▲柳 君かすむ

同 榊田川

河邊柳
春くれば若えもさすやくし田川柳の髪の乱れ安きに

八三

▲伊勢嶋
松のむら立

同 雲津崎

春月
晴ぬかと雲つか崎の春風や朧月夜の空に吹らん

八四

▲秋月 白菊

上総 黒戸濱

宿を出ておほつかなしやうは玉の黒戸の濱のまた夜深きに

八四

▲塩船 真幌

常陸 久自河

昔よりさきく有てやくし川の久敷すめる流なるらん

八四

▲つかなみ

近江 黒津里

草枕ゆふへの空も墨染のくろつこの里はまたはるかなり

八四

▲みしねつく 三ッ

旅寝 暗部里

みしねつきうたふ聲にそしられけるくらふの里も豊成世を三ッ

八四

▲山花 五月雨

同 朽木袖

袖冬月
花さかぬくち木の袖のたくひとや見る人もなき冬の夜の月

八四

▲近江てふ

同 栗本里

寄糸懸
契てそよるをもまため思ひのみ亂るゝ糸のくりもとの里

八四

▲むは玉 白波

美濃 黒田河

五月雨はおりる雲のくろた河空の海かと思ふはかりに

八五

▲鷲 椎柴 菊杖

飛騨 位山

貴殿待花
位山嶺もふもとをしなへて花咲ぬへき春をこそまて

八五

▲埋れ木は

信濃 久米路橋

定なき世を渡るよりあやうからしくめちの橋を虫ははむ共

八五

▲中むしはむ

上野 群馬里

待人は頼めし夜半も音せぬを誰かくるまの里といふらん

八五

▲花むは玉

下野 黒髪山

たらちめのなてし昔も遠き世に黒かみ山の名さへなつかし

八五

▲山菅 五月雨

陸奥 栗伯山

小男鹿の妻とや共にこかるらむくりこま山の秋の紅葉々

八五

▲真菅 笠 雪

同 栗原

都より又帰りこんくり原のあねはの松上面かはりすな

八五

▲ことなし 草 雉

同 黒塚

思へたゝ人のあたちの黒つかにすむは心の鬼としらなん

八五

▲ほうの木 鹿

同 黒濱

行末は空の海にやつゝくらん波もひとつにみゆる雲濱

八五

▲藁 あねはの松

同 黒戸橋

契ても人の心のあさふつやくるとの橋のふみたにも見す三ッ

八五

▲都のつと

能登 久毛津

朝朝沖の浪間に立きゆる雲津の船や見えかくれする

八六

▲安達原 鬼籠

若狭 雲濱

契ても人の心のあさふつやくるとの橋のふみたにも見す三ッ

八六

▲天の河原

越前 黒戸橋

契ても人の心のあさふつやくるとの橋のふみたにも見す三ッ

八六

▲朝水 三ッ

能登 久毛津

契ても人の心のあさふつやくるとの橋のふみたにも見す三ッ

八六

▲すゝめくり

能登 久毛津

契ても人の心のあさふつやくるとの橋のふみたにも見す三ッ

八六

▲こし船

能登 久毛津

契ても人の心のあさふつやくるとの橋のふみたにも見す三ッ

八六

- ▲新羅弁 酒かしま
- ▲天地のきはめ 稲をつく
- ▲朝日影梅 川橋立石橋
- ▲菅笠螢 八雲立出雲
- ▲霰降戀 いひもやられぬ
- ▲海塩干妹 鹽友舟鱸
- ▲浦山宮郭公 音無川女郎花
- ▲玉も 植田海人
- ▲みるめ 夕ゐる雲
- ▲松の古枝 完オ
- ▲麓行舟人 嵐 完ウ

- 同 熊 来
- 丹波 雲田村
- 同 紅 村
- 丹後 倉椅山
- 出雲 隈 關
- 美作 久米左良山
- 備後 口無泊
- 紀伊 黒牛瀉
- 同 熊 野
- 豊前 倉無濱
- 同 朽綱山
- 未勸 久麻山嵩

浪の上にたつ夕霧や月影のくまきに渡る船の通路
 風になひく雲田の村に刈稻のほにあらはれぬ豊成世は
 里の名も露や染らん紅のむらこにみゆる秋の紅葉ゝ
夕曇 夕闇のくらはし川に飛螢もゆる物から涼しかりけり
寄閑戀 頼めこし我通路もあた人の心やくまの關と成らむ
歴夜待戀 逢ぬ夜の数は恨しさもあらはくめのさら山更に待みん
 都思ふ涙の色は口なしの泊もはてぬ旅を悲しき
海邊初春 くら牛の海も霞める朝日影紅匂ふ春は来にけり
神祇 かしこしな人の心のくまの山隈さへてらす神の光は
 打まれて早苗を取し乙女らか帰れば空もくらのしの濱
冬月 雨と降涙に袖はくたみ山雲るのよそにこふる人ゆへ 完オ
 散はてし木葉の跡を吹風や何かは月のくま山の嶽

八三 八二 八一 八〇 七九 七八 七七 七六 七五 七四 七三 七二 七一 七〇 六九 六八 六七 六六 六五 六四 六三 六二 六一 六〇 五九 五八 五七 五六 五五 五四 五三 五二 五一 五〇 四九 四八 四七 四六 四五 四四 四三 四二 四一 四〇 三九 三八 三七 三六 三五 三四 三三 三二 三一 三〇 二九 二八 二七 二六 二五 二四 二三 二二 二一 二〇 一九 一八 一七 一六 一五 一四 一三 一二 一一 一〇 〇九 〇八 〇七 〇六 〇五 〇四 〇三 〇二 〇一

續松葉集第一終 六字堂 宗惠 完ウ